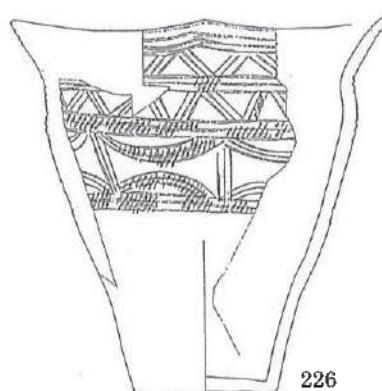
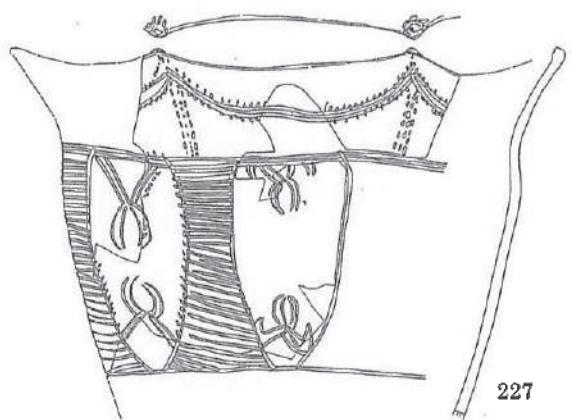


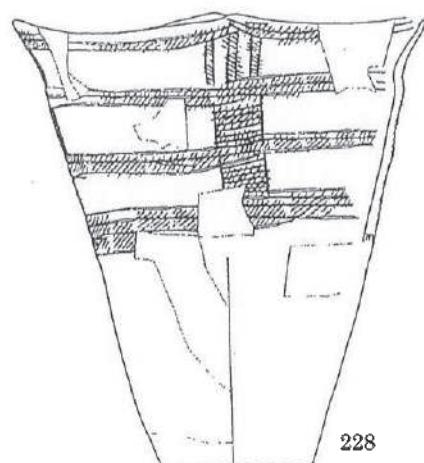
F1 区 Q-101 SK(F)419A



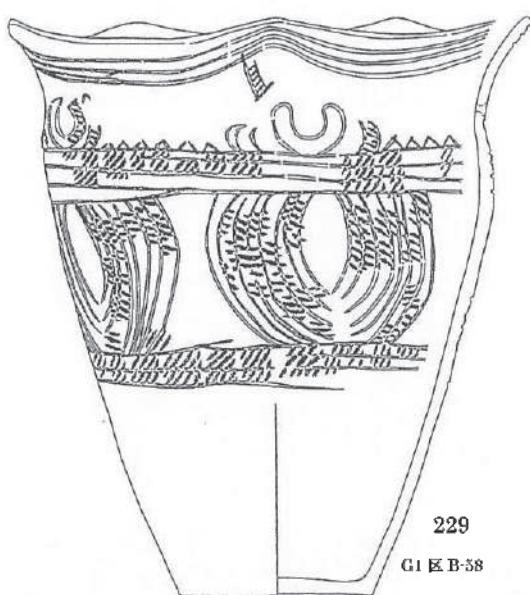
D7 区 ZF-91 SK(F)12



D2 区 ZX-79



D7 区 ZF-91 SK11

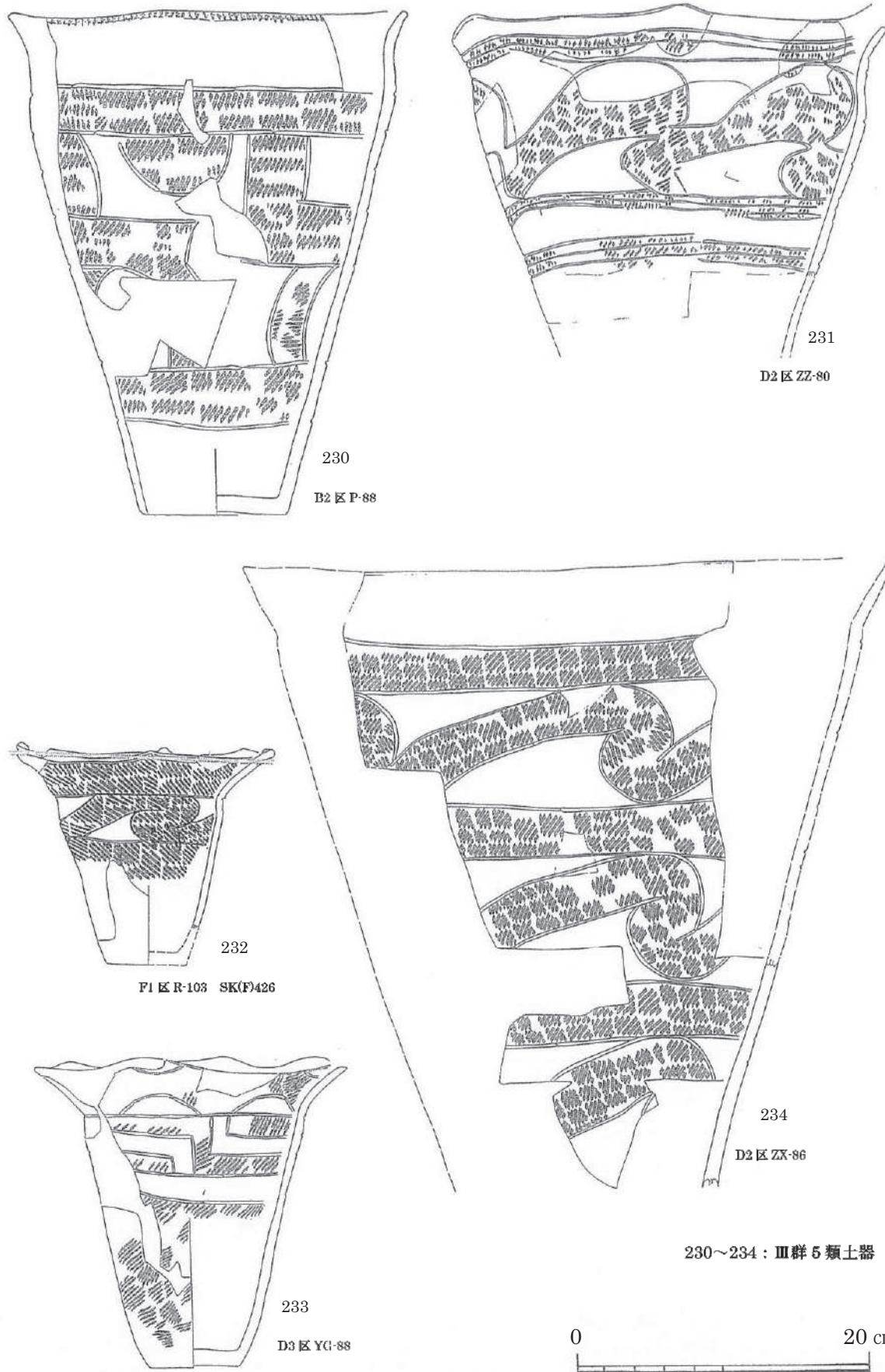


G1 区 B-58

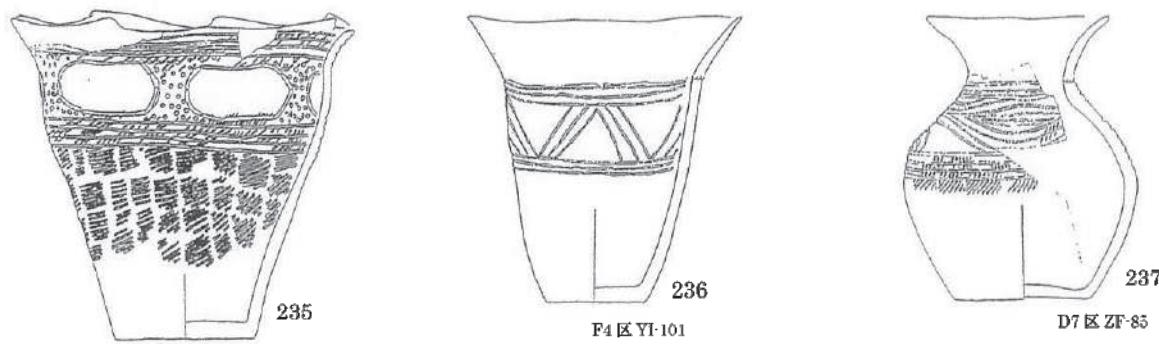


225～229：Ⅲ群 5類土器

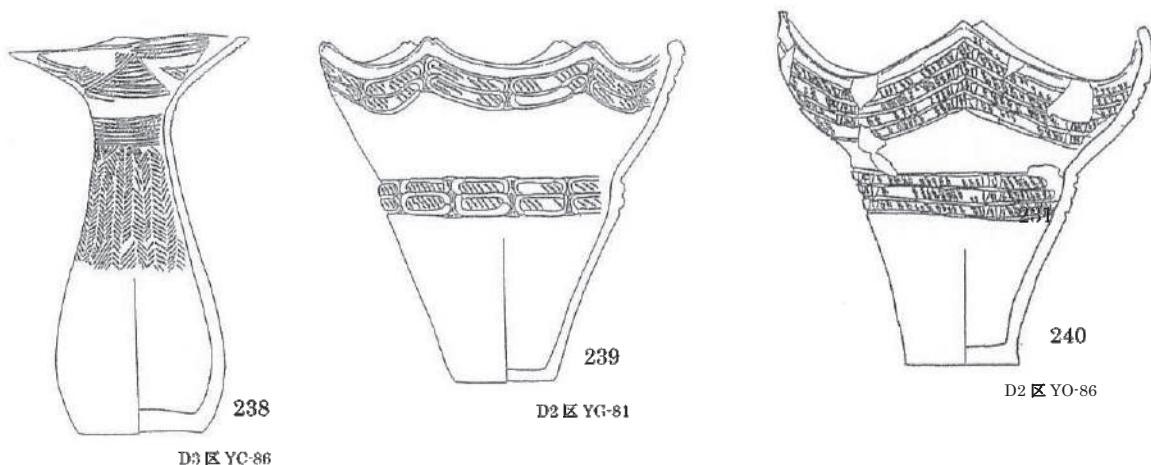
第 121 図 出土土器(27)



第 122 図 出土土器(28)



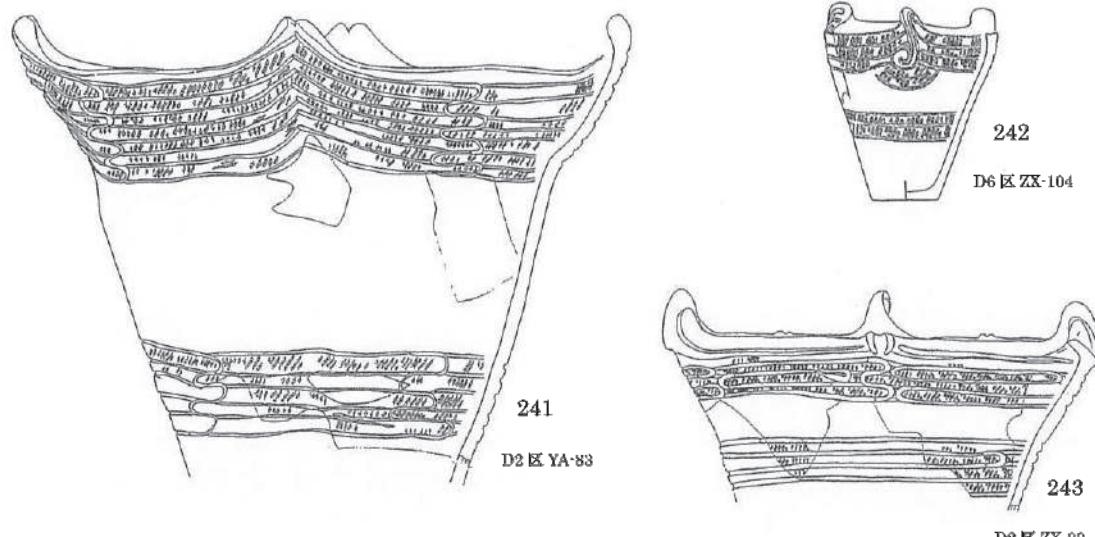
F4 区 YI-101 SK(F)27



D3 区 YC-86

D2 区 YG-81

D2 区 YO-86



D2 区 YA-83

D6 区 ZX-104

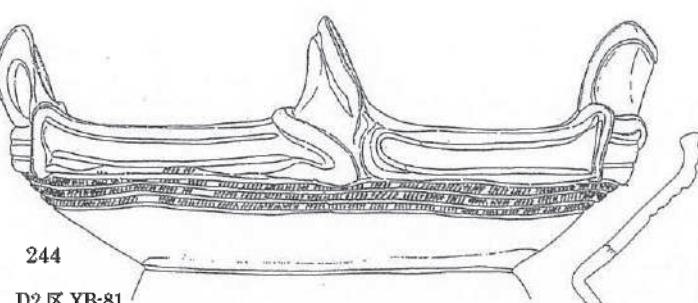
242

243

D2 区 ZX-83

235～238：Ⅲ群 5 類土器

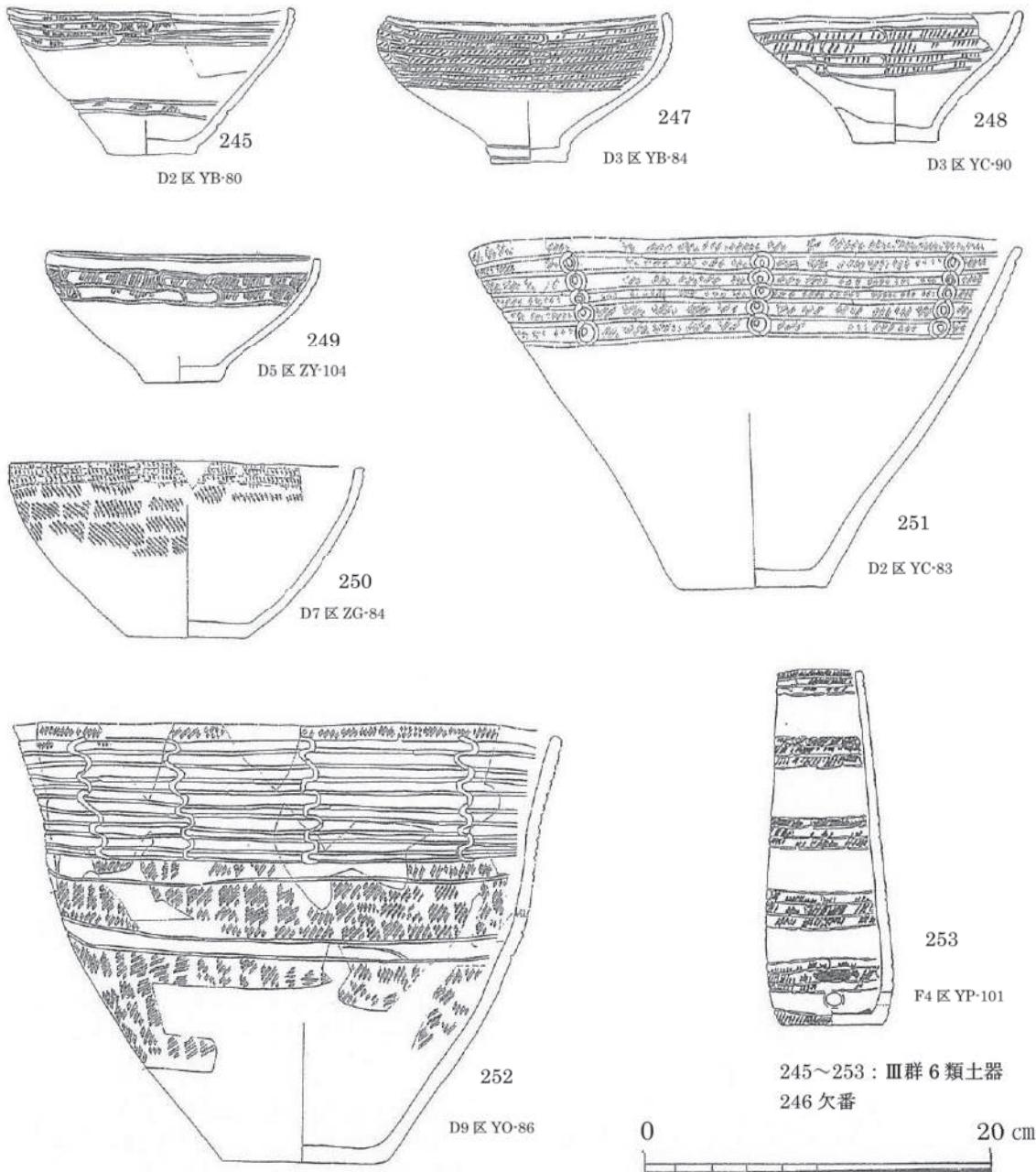
239～244：Ⅲ群 6 類土器



244
D2 区 YB-81



第 123 図 出土土器(29)



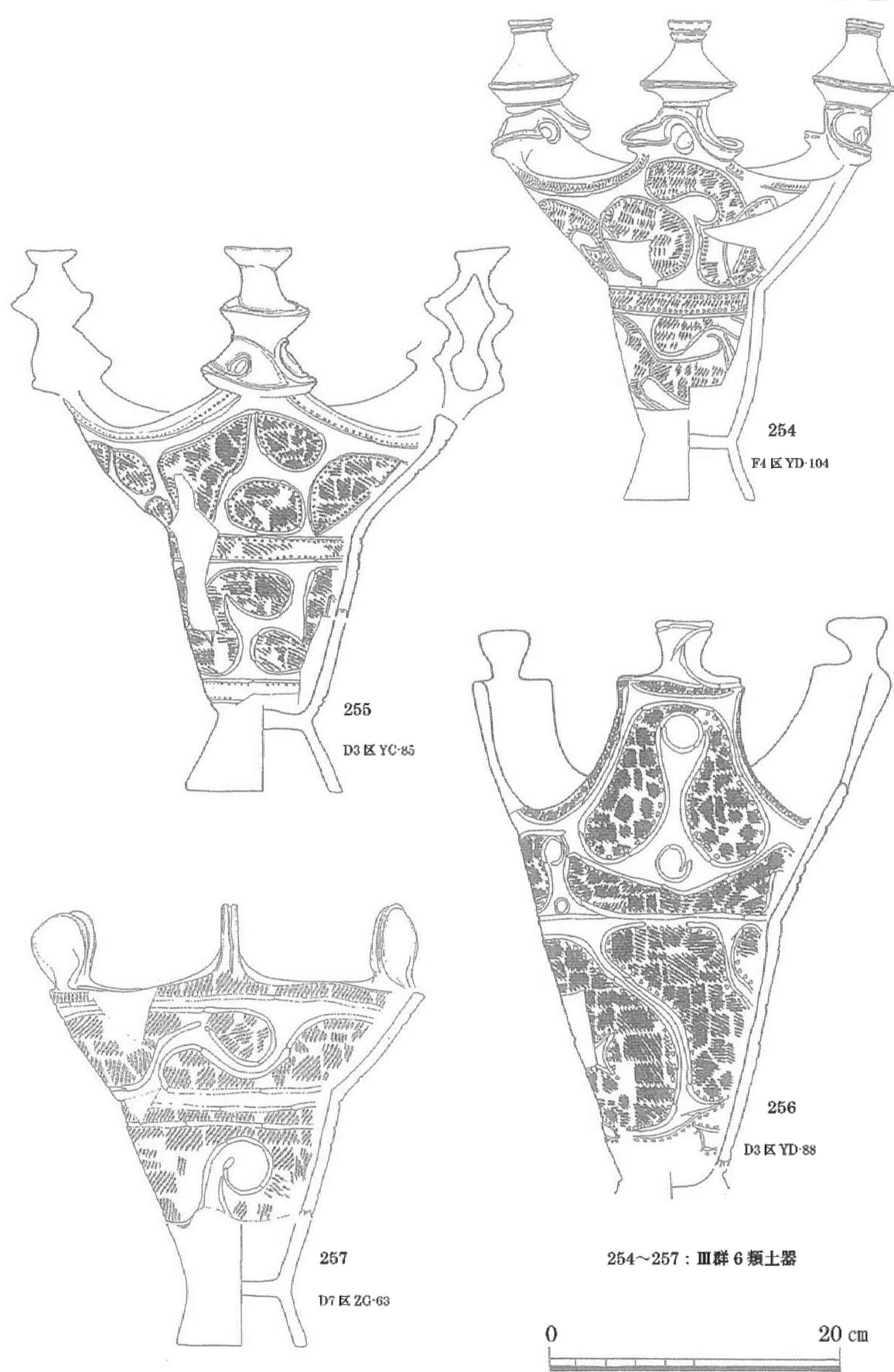
第124図 出土土器(30)

7類：後期後葉の土器：後期後葉の土器で、十腰内IV式・V式、または宮戸III式、新地式の段階のものである。復元されたものは深鉢1点(第129図291)である。万座北側地区の第910号環状配石遺構周辺から出土した。口縁には9個の突起とその間に小突起を有し、突起部には瘤が張り付けられている。主文様は入組帶状文で、区画帶内には刻目が充填される。口縁部・胴部の磨消繩文にはLR繩文が使用される。焼成は良好、色調は明褐灰色を呈する。

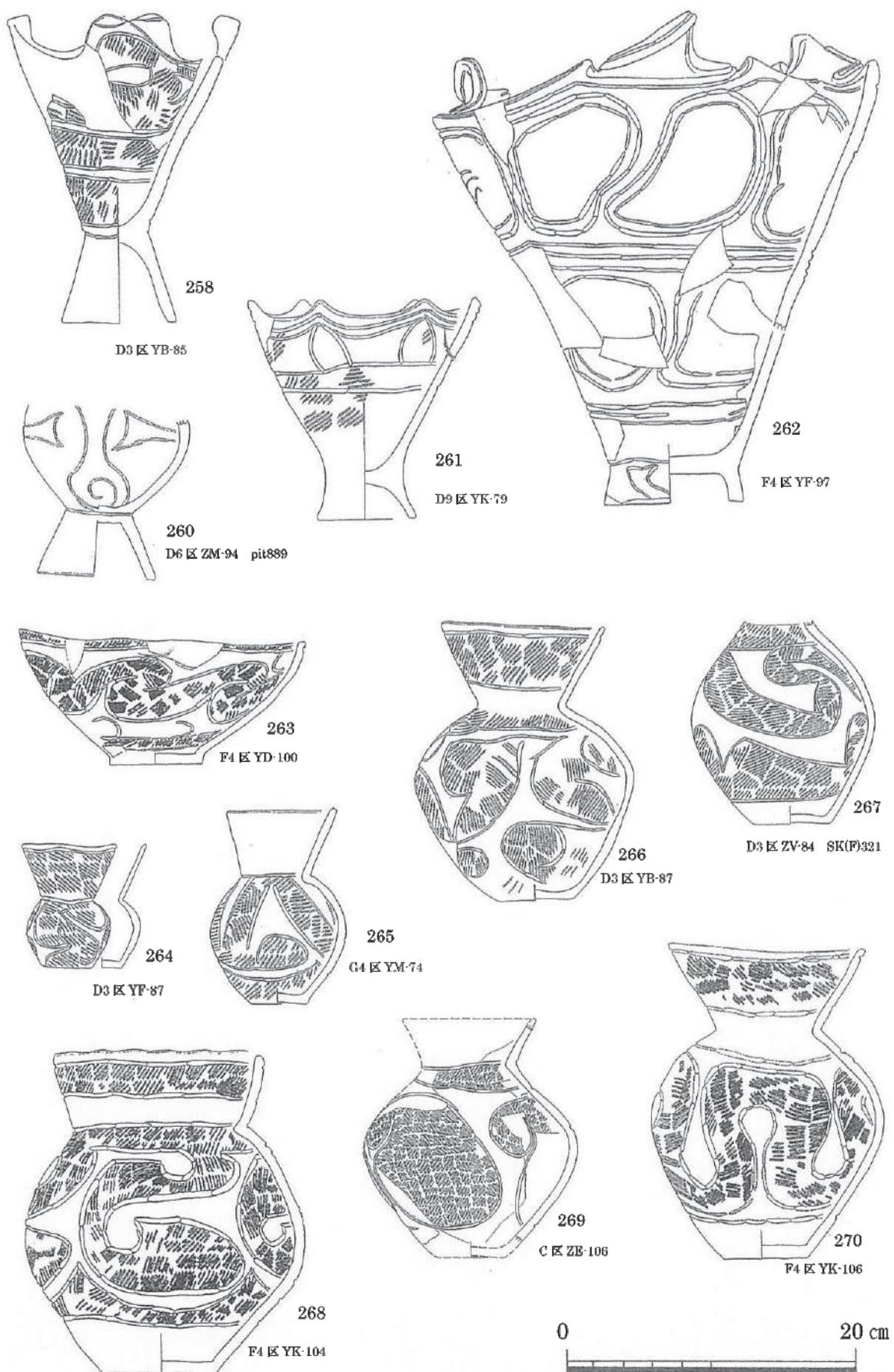
IV群 晩期の土器(第129図292~294)

晩期に位置づけられる土器を一括した。本群土器に伴う遺構は確認されなかった。

1類：入組三叉文の土器

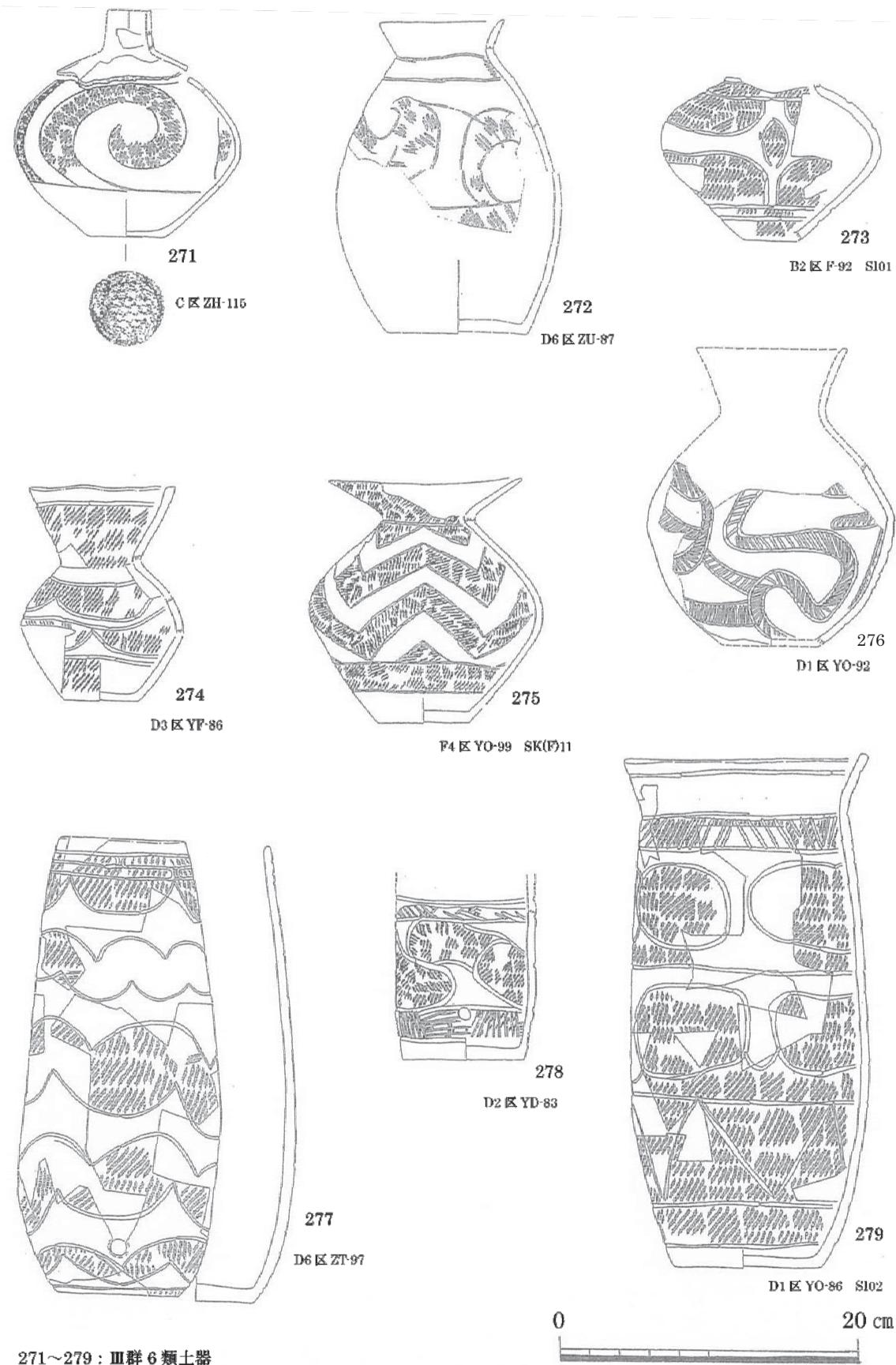


第 125 図 出土土器(31)



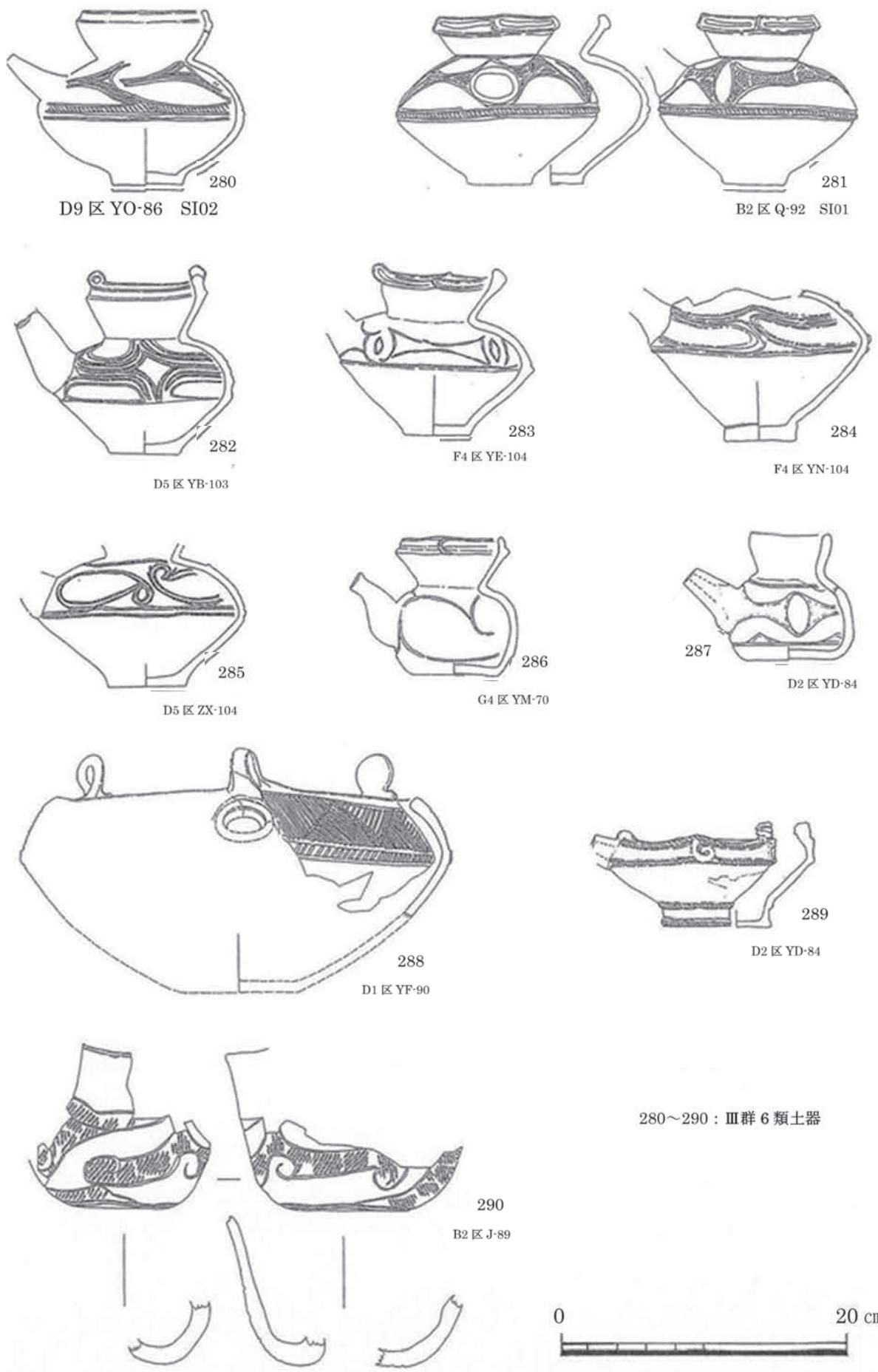
258~270：Ⅲ群 6 類土器
259 欠番

第 126 図 出土土器(32)

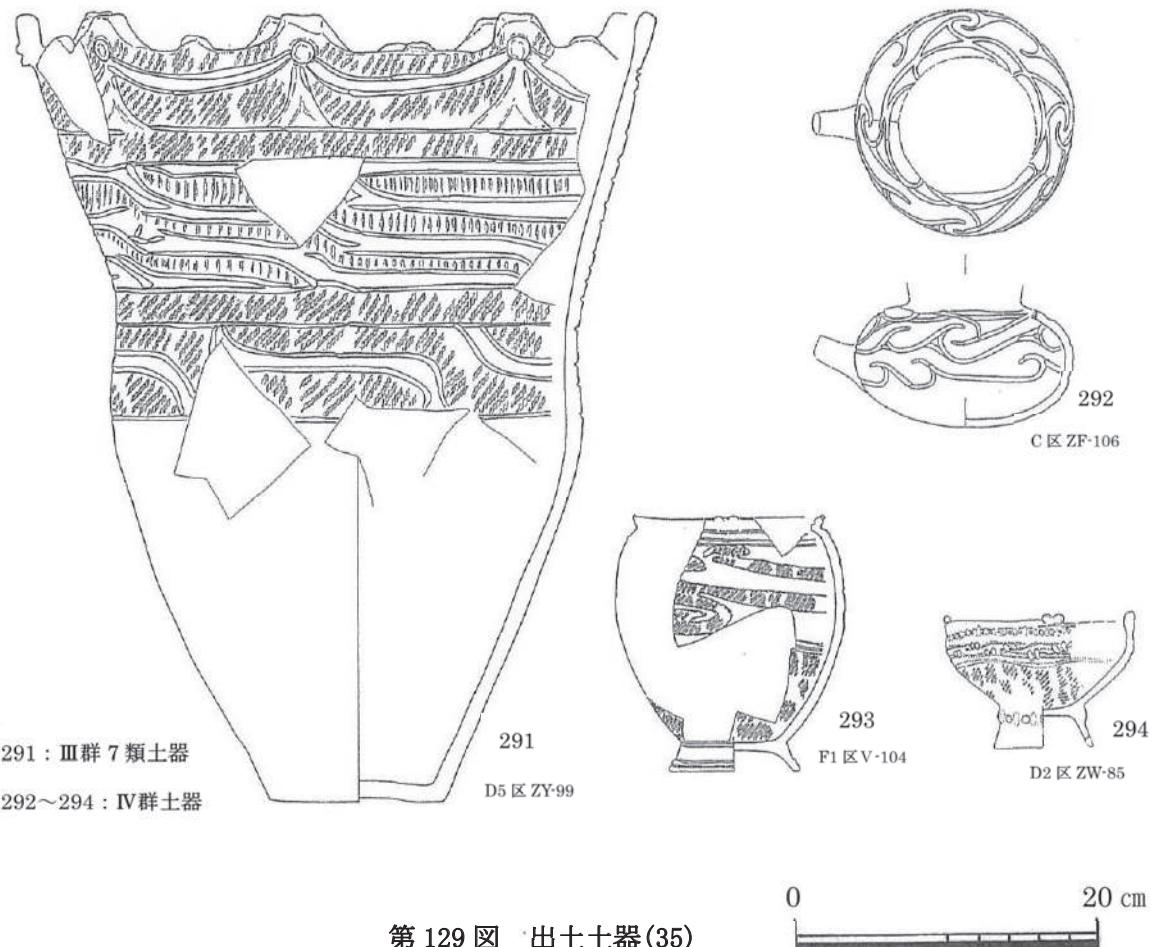


271~279: III群 6類土器

第 127 図 出土土器(33)



第 128 図 出土土器(34)



第 129 図 出土土器(35)

器種は鉢形土器、注口土器がみられる。三叉文やX字文が浮き彫り的な手法によって施文されている。大洞B式土器に相当する。

2類：羊齒状文の土器(第 127 図 294)

器種は小型の深鉢形土器、台付土器がみられる。文様帶は口縁部に限定され、胴部にはLR繩文が多用される。大洞BC式土器に相当する。

3類：雲形文の土器

器種は鉢形土器(293)、台付鉢形土器のほか、浅い皿状のものもみられる。台付鉢形土器の文様帶は胴部中程まで及んでいる。大洞C1式土器に相当する。

V群 弥生土器

遺跡北側・同東側から出土しているがその量は少ない。器種・文様を概観する。なお、弥生期の遺構は確認できなかった。土器は、深鉢形が主体となり、壺形のものもみられる。口縁部上端に数条の平行する弧線文や沈線文を施文するものと、口縁部には1～2段の撚糸の回転文が施文され、その下に幅広の無文帯を挟み胴部に縦位または横位の念施文が施文される。原体はL繩文が多用される。後期末の小坂X式土器に相当するものである。

② 石 器(第 130 図～153 図)

出土した石器は 14,672 点を数える。そのうち剥片石器は 11,784 点、礫石器は 2,888 点である。遺構内出土点数は 1,711 点(12%)、遺構外出土点数は 12,961 点(88%・表採含む)である。『大湯環状列石(II)』と数値に違いがあるが、本報告を正式な数値とする。

石 鏃 (第 130 図、第 144 図 1～30)

1,306 点が出土した。遺構内出土は 240 点である。遺構外出土分布は、万座・野中堂環状列石の周囲、万座北側で確認されている環状配石遺構群や台地北側堅穴住居跡群からの出土が多い。遺跡東側の一本木後口地区や遺跡南側地区など中心部から遠ざかるに従いその密度は薄い。

遺構に伴う例として A2 区第 17 号配石遺構で 13 点、D9 区第 1 号プラスコ状土坑 7 点の出土例もある。遺構外ではグリッド(5m 方眼)あたりの出土量は 1～3 個であるが、万座環状列石の北西側 5 本柱建物の周辺及び同南側、野中堂環状列石の北側部分では、12 個～24 個が出土したグリッドもある。

石質は、硬質頁岩が最も多く、珪質頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩と続く。

形態から III 群 8 類に分類され、I 群とした形態のものの出土量が多い。

I 群…有茎石鏃で、形態から 3 類に細分される。

1 類…平基石鏃(420 点)、2 類…凸基石鏃(208 点)、3 類…凹基石鏃(276 点)

II 群…無茎石鏃で、形態から 4 類に細分される。

1 類…平基石鏃(34 点)、2 類…円基石鏃(83 点)、3 類…尖基石鏃(150 点)、

4 類…凹基石鏃(62 点)

III 群…茎部にくびれをもつもの、1 点。

分類不明…欠損品 72 点

石 錐 (第 131 図、144 図 31～42)

327 点が出土した。遺構内出土は 23 点。分布範囲は石鏃に類似する。

石質は硬質頁岩が最も多く、ほかに珪質頁岩、黒色頁岩等がある。

形態から III 群に分類された。I 群の出土量が多い。

I 群…つまみ部と錐部が区別できるもので、2 類に細分できる。

1 類…つまみ部と錐部の境界が明確なもの。125 点

2 類…つまみ部と錐部の境界が不明瞭なもの。113 点

II 群…つまみ部から錐部へと徐々に狭くなり、つまみ部と錐部が区別できないもの、またはつまみ部が小さい棒状のもの。7 点

III 群…剥片に部分的に短い錐部を作り出しているもの。82 点

石 匙 (第 132 図、145 図 43～146 図 65)

546 点出土した。遺構内出土は 38 点である。分布は万座・野中堂地区、万座北側地区からの出土数が多い。特に数量が集中する区域は認められないが、万座環状列石北西側と野中堂環状列石南側出入り口付近でややまとまった出土がみられる。

石質は硬質頁岩が最も多く、黒色頁岩などが続く。

形態からII群5類に分類される。I群2類が約3割を占める。

I群…縦型のもので、刃部の方向によって3類に細分できる。

1類…主要刃部が一側縁。137点 2類…主要刃部が二側。205点

3類…主要刃部が三側縁。47点

II群…横型のもので、刃部の方向によって2類に細分できる。

1類…下側縁に刃をもつもの。50点

2類…2側縁あるいは3側縁に刃をもつもの。107点

石 築（第133図、146図66～81）

114点出土した。遺構内出土は7点。数量的に少なく石鎌のような濃い分布を示さないが、類似した分布を示している。

石質は硬質頁岩が最も多く、黒色頁岩が続く。

形態からIII群に分類される。II群・III群で全体の8割を占める

I群…基部から先端部までの幅がほぼ一定で棒状をなすもの。14点

II群…基部が先端部より狭く、撥状を呈するもの。43点

III群…基部の幅があり、台形を呈するもの。47点

分類不明…10点

搔 器（第134図、147図82～96）

9,476点が出土した。剥片石器の中で最も出土量が多く、石器全体の約64.6%を占める。遺構内出土は934点。分布は万座・野中堂環状列石の周囲、万座北側で確認されている環状配石遺構群や台地北側の住居跡群を取り囲むように分布する。特に万座環状列石の南側をのぞいた北・東・西側、野中堂環状列石南側出入り口付近に集中しており、1グリッドあたり50点～100点を超えるところもある。遺構密集部から遠ざかるに従い、その密度は薄くなる。一本木後口配石遺構があるA区からも出土しているが49点と少数である。

石質は硬質頁岩が最も多く、黒色頁岩、珪質頁岩などが続く。

欠損品が多いが、刃部によって3分類した。

I群…刃部が1側縁のもの。2,674点

II群…刃部が2側縁のもの。2,814点

III群…刃部が3側縁のもの。1,518点

分類不明…2,470点

三脚石器（第135図、148図97～101）

8点出土した。三叉状に加工されたものである。すべて万座環状列石周辺の遺構外出土である。

石質は、硬質頁岩、頁岩が使用されている。

嘴状石器（第156図102）

嘴状を呈するものである。遺構外から1点出土した。石質は硬質頁岩である。

打製石斧（第 136 図、1148 図 103～108）

6 点が出土した。遺構内出土は 1 点。万座環状列石東側から集中して出土している。

石質は硬質頁岩、緑色凝灰岩、黒色片岩、砂質凝灰岩、緑色片岩が使用されている。

磨製石斧（第 137 図、149 図 109～129）

295 点が出土した。遺構内出土は 33 点。分布範囲は石鏃と類似する。

石質は、緑色凝灰岩や石英閃綠玢岩、緑色片岩が多く使われ、砂質凝灰岩、火山礫凝灰岩、安山岩、片岩、凝灰質泥岩、黒色片岩、緑色砂質凝灰岩、変朽安山岩、石英安山岩、花崗閃綠岩、蛇紋岩、砂岩、硬質頁岩、流紋岩、凝灰岩、粘板岩など石材は多種にわたる。

形態から 2 群に分類される。

I 群…定角式磨製石斧で、90%以上がこれにあたる。刃部に使用痕がみられるものが多い。

II 群…乳棒状の磨製石斧である。

石 錘（第 138 図、150 図 130～138）

礫の両端を打ち欠いているものを石錘とした。334 点が出土した。遺構内出土は 47 点である。

分布は万座・野中堂環状列石の周辺および万座環状列石の北側に偏り、万座環状列石西側と野中堂環状列石北側においてはグリッドあたり 10 点をこえるところもある。

石質は、砂質凝灰岩や泥岩、石英安山岩、凝灰質泥岩、石英閃綠玢岩が多く使われ、他には緑色凝灰岩、泥質凝灰岩、流紋岩、火山礫凝灰岩、硬質頁岩、軽石質凝灰岩、変朽安山岩、片岩、緑色片岩、安山岩、玄武岩、凝灰岩など多種である。

敲 石（第 139 図、151 図 139～147）

礫の一部に打ち欠きや敲打の際の剥離が見られるものを敲石とした。347 点が出土した。遺構内出土は 53 点である。出土分布は石鏃に類似する。野中堂環状列石周辺では 1 グリッドから 5～7 点出土するところもある。

石質は、泥岩、緑色凝灰岩、砂質凝灰岩、石英閃綠玢岩が多く、凝灰質泥岩、泥質凝灰岩、流紋岩、玄武岩、軽石質凝灰岩、片岩、石英安山岩、安山岩、変朽安山岩、火山礫凝灰岩など多種である。

凹 石（第 140 図、151 図 148～151）

841 点が出土し、遺構内出土は 97 点である。礫石器の中で最も出土量が多い。分布は石鏃に類似するが、野中堂環状列石南側からまとまって出土したグリッドもある。遺構出土例として D 9 区第 2 号竪穴住居跡から 29 点、第 2 号フラスコ状土坑から 28 点、第 4 号フラスコ状土坑から 31 点など多量に出土した例もある。

石質は石英閃綠玢岩、凝灰岩、砂質凝灰岩、凝灰質泥岩が多く使われ、他には石英安山岩、緑色凝灰岩、安山岩、流紋岩、玄武岩、泥岩、閃綠岩、軽石質流紋岩、片岩、緑色片岩、砂岩、変朽安山岩、軽石質凝灰岩、角礫凝灰岩、火山礫凝灰岩、粘板岩など多種である。

磨 石 (第 141 図、151 図 152~158)

874 点が出土した。遺構内出土は 69 点である。分布は石鎌に類似している。野中堂環状列石周辺では 1 グリッドから 6~9 点出土するところもある。

石質は、石英閃緑玢岩、石英安山岩、凝灰質泥岩、砂質凝灰岩が多く使われ、他には凝灰岩、安山岩、泥岩、火山礫凝灰岩、閃緑岩、片岩緑色硬質凝灰岩、流紋岩、チャート、花崗閃綠岩、玄武岩、石英斑岩、変朽安山岩、硬質頁岩、粘板岩、軽石質凝灰岩など石材は多様である。

石 盆 (第 142 図、152 図 159~153 図 165)

183 点出土した。遺構内出土は 35 点である。欠損品が多い。万座・野中堂環状列石の周囲、万座北側の環状配石遺構群や台地北側の住居跡群を取り囲むように分布している。

万座環状列石内帶第 42 号、同 97 号配石遺構、同 129 号配石遺構(石列)では構築材として利用されている。

平面形が橢円形(卵形)を呈するものが多く、装飾的な 4 つの突起をもつもの(159)、裏面(側面)に刻みを入れ脚の指先を表現したようなものもある。

石質は、凝灰岩、砂質凝灰岩が多く、他には石英安山岩、石英閃緑玢岩、緑色凝灰岩、泥質凝灰岩、凝灰質泥岩、泥岩、軽石質凝灰岩、流紋岩質凝灰岩、凝灰質砂岩、砂質泥岩、安山岩、流紋岩、スコリア状安山岩等多種である。

砥 石 (第 143 図、153 図 166~168)

14 点出土した。遺構内出土は 2 点である。万座・野中堂地区からの出土で、破損品が多い。

石質は砂質凝灰岩が多く、他に石英安山岩、凝灰質泥岩、安山岩、軽石質凝灰岩、凝灰岩、石英閃緑玢岩等がある。

第 130 図~143 図に遺構内外出土の石器分布を示した。万座・野中堂地区並びに万座北側地区に位置する環状配石遺構群、同北側地区台地縁の竪穴住居群周辺に濃い分布が見られ、遺構密集部から遠ざかるにつれその密度は希薄となっていく。配石遺構が密集する一本木後口地区では土器と同様に遺構内外からの出土数は少ない。

また、万座寄りに位置する環状配石遺構群(万座 a 群)においては、群内と群外の出土量に違いがみられる。個々の遺物毎に特徴的な出土分布を示すものがある。打製石斧は万座地区、三脚石器は万座地区・万座北側地区から出土している。

米代川流域で特徴的な分布を示すものとして三脚石器がある。米代川中流域に所在する伊勢堂岱遺跡(北秋田市)では 367 点、塚ノ下遺跡(大館市)では 25 点出土している。米代川上流域に位置する遺跡からの出土数が減少することが文献 228 によって指摘されている。市内遺跡からの出土報告例は本遺跡だけであり、三脚石器は出土遺跡や出土量からみて米代川中流域に特徴的な遺物であることが理解できる。

石器の素材・石材は 20 種近くあり、剥片石器には硬度が高く、鋭利な刃部を得やすい頁岩が多く用いられている。第 V 章・第 33 表に環状列石の使用石材を記した。列石の構築材には頁岩は含まれないが、石器に使用される石材はいずれも米代川・大湯川流域で採取可能である。

交易などを示す資料として黒曜石やアスファルトがある。本遺跡出土の黒曜石の分析結果を第IV章3に収録した。男鹿産12点、深浦産1点のほか、産地不明3点であることが判明した。黒曜石については、秋田県立博物館の調査・分析によって、北東北の主要産地として男鹿産、深浦産のほかに田沢湖産・北上山系のものがあることが報告されている。分析分布から本遺跡出土の黒曜石には田沢湖産や北上山系のものである可能性が高い。

一方、礫石器の石材も20種に及ぶ。これらは遺跡眼下を流れる大湯川やその本流である米代川合流域において入手可能なものである。環状列石の構築材として使用されている石英閃緑玢岩や安山岩は粒径や摩耗度から大湯川中流域(大湯温泉街から関上集落付近)から採取された可能性が高く、礫石器に使用された石材も、配石遺構の構築材とともにこの流域から採取されたものと考えられる。

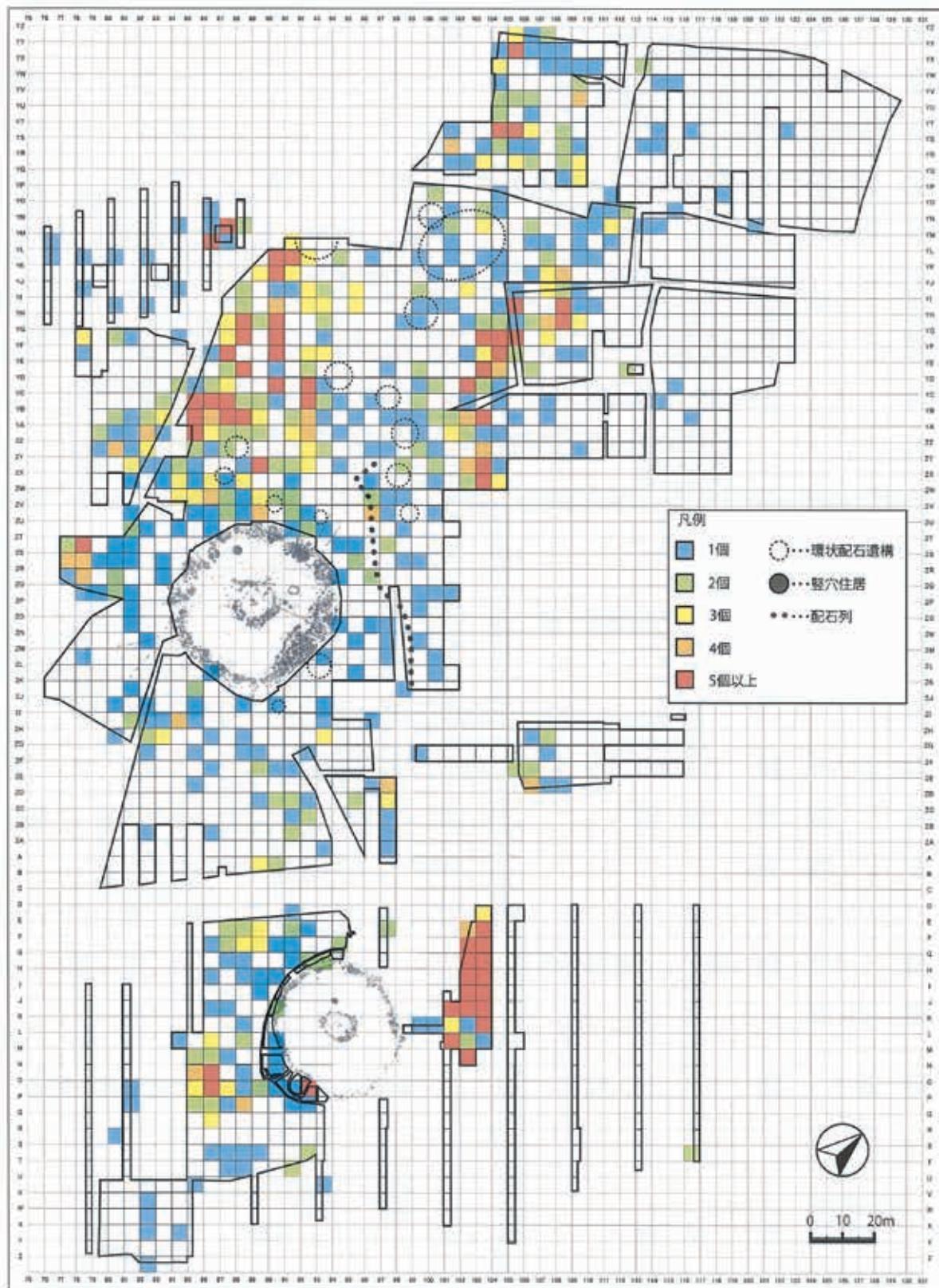
本遺跡の出土石器並びに伊勢堂岱遺跡、小牧野遺跡、天戸森遺跡(鹿角市)の石器組成割合を第24表に示した。本遺跡の組成は、搔器が最も多く全体の約65%を占め、次に石鏃、凹石、石匙等となる。その組成は集落跡である天戸森遺跡と同じような傾向を示している。また、伊勢堂岱遺跡や小牧野遺跡と比較した場合、小牧野遺跡とは似た石器組成を示すが、伊勢堂遺跡とは剥片石器と礫石器の組成割合が逆転する。

第27表 石器組成の比較

遺跡名/種別	石鏃	石槍	石錐	石匙	石箇	搔器	三脚石器	打製石斧
大湯環状列石	1306 8.9%	0	327 2.2%	546 3.7%	114 0.1%	9476 64.5%	8	6
伊勢堂岱遺跡	53 2.3%	32	19	39	44	113 4.9%	213 9.3%	4
小牧野遺跡	128 4.7%	8	55 2.0%	40	156 5.5%	1687 62.3%	0	3
天戸森遺跡	154 10.9%	21	54 3.8%	94 6.6%	49	707 49.9%	2	3

遺跡名/種別	磨製石斧	石錐	敲石	磨石	凹石	石皿	砥石	単円状打製石斧
大湯環状列石	295 2.0%	334 2.2%	347 2.3%	874 5.9%	841 5.7%	183 1.2%	14	0
伊勢堂岱遺跡	101 4.4%	469 20.5%	11	21	971 42.5%	128 5.6%	3	2
小牧野遺跡	68 2.5%	15	490 18.1%	47 1.7%	2	1	0	0
天戸森遺跡	52	5	0	124 8.7%	110 7.8%	40	2	0

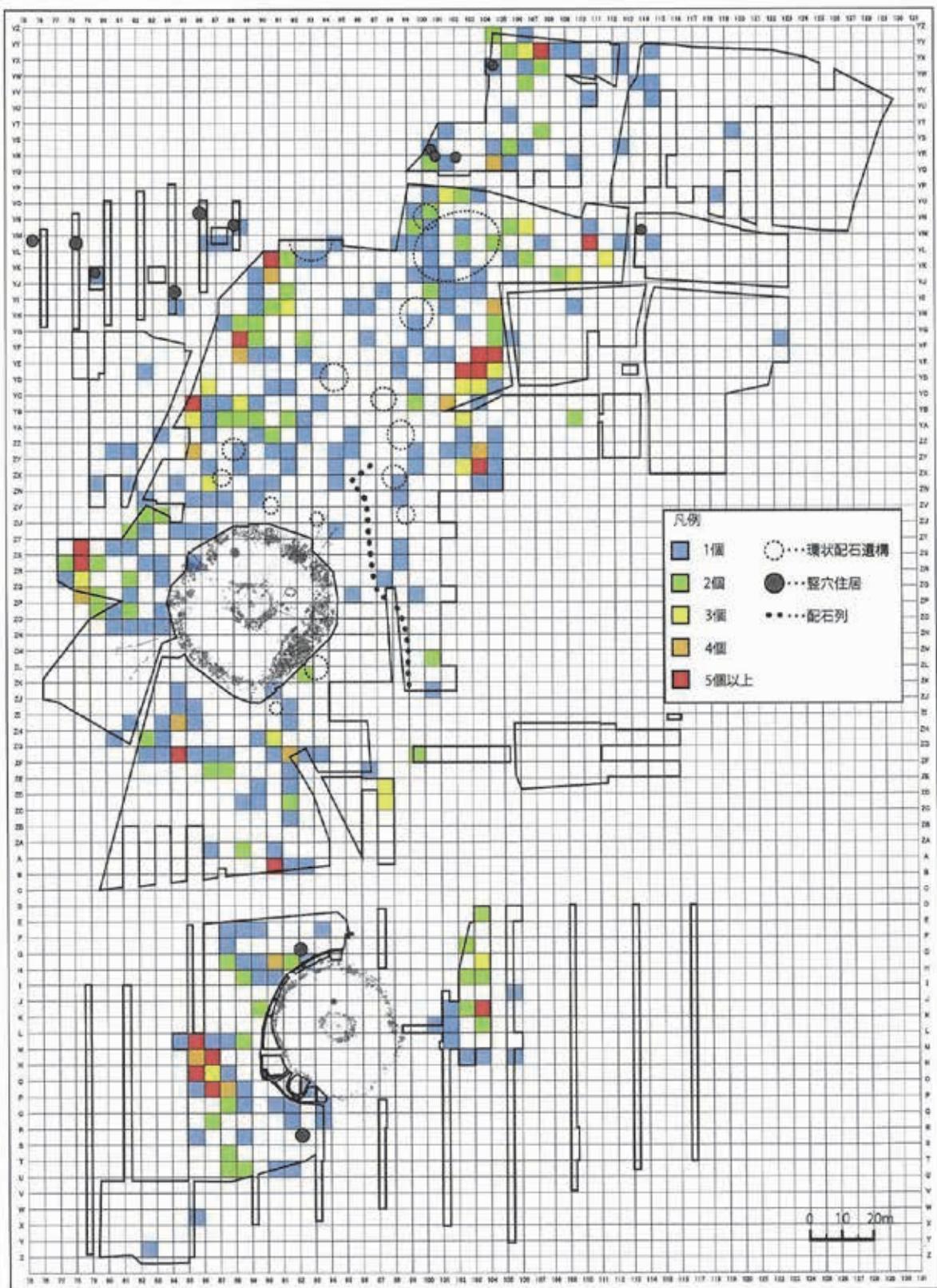
遺跡名/種別	靴形石器	異形石器	嘴状石器	礫器	トランシヤ様石器	環状石斧	その他	合計
大湯環状列石	0	1	0	0	0	0	0	14672
伊勢堂岱遺跡	0	0	1	12	8	1	40 1.7%	2285
小牧野遺跡	7	2	0	0	0	0	0	2709
天戸森遺跡	0	0	0	0	0	0	0	1417



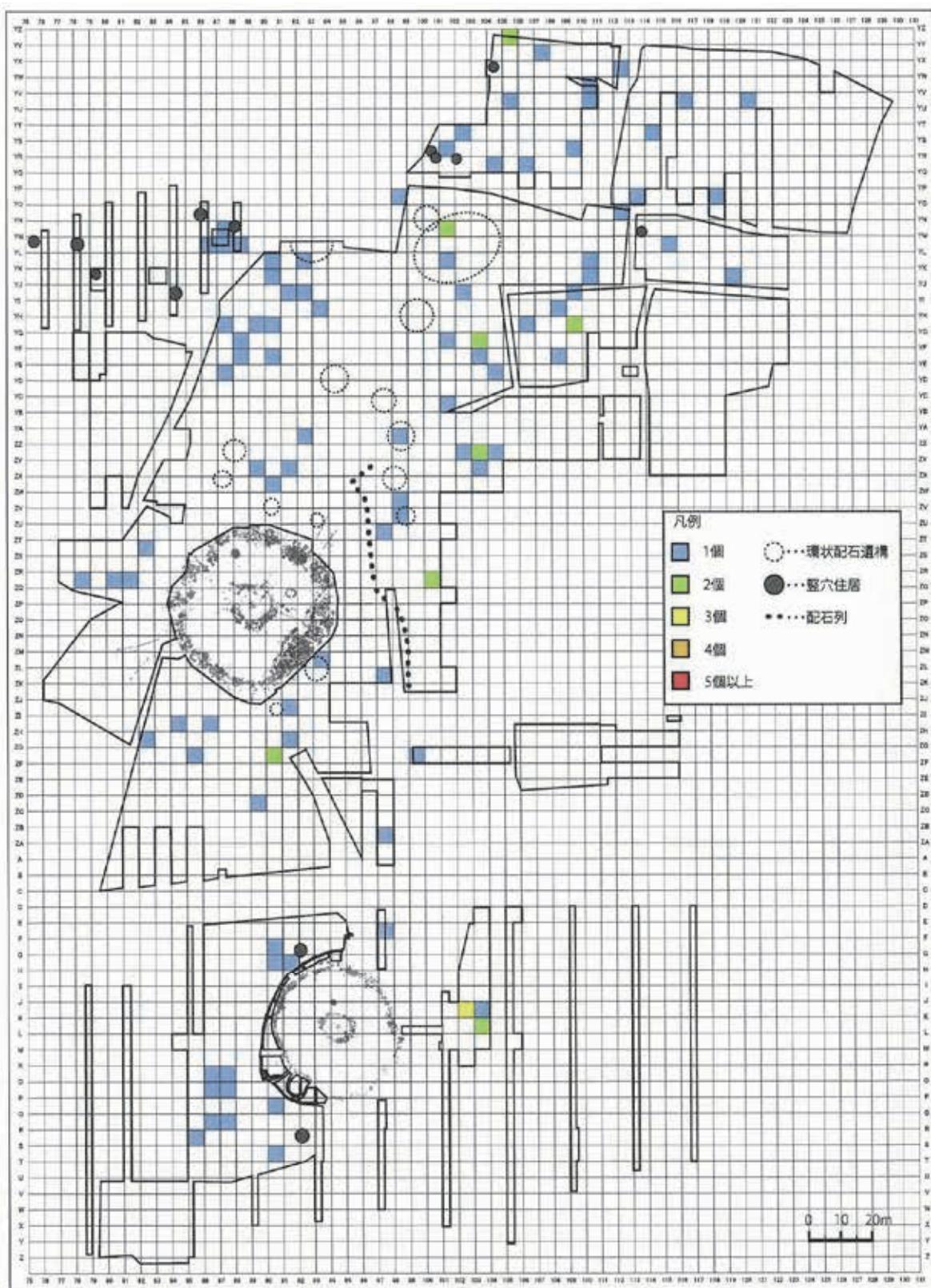
第130図 石鏸分布図



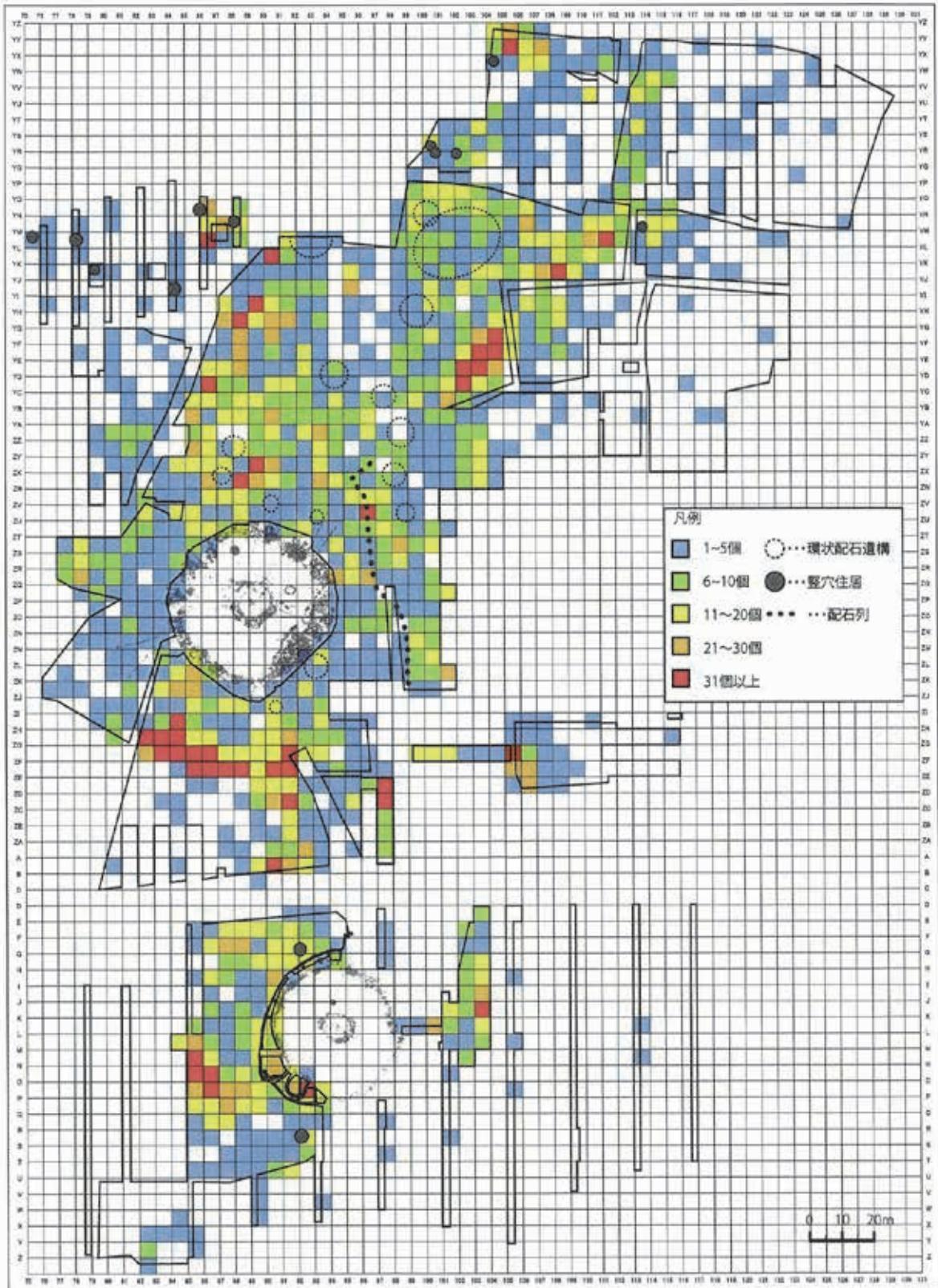
第131図 石錐分布図



第132図 石匙分布図



第133図 石籠分布図



第 134 図 掘器分布図



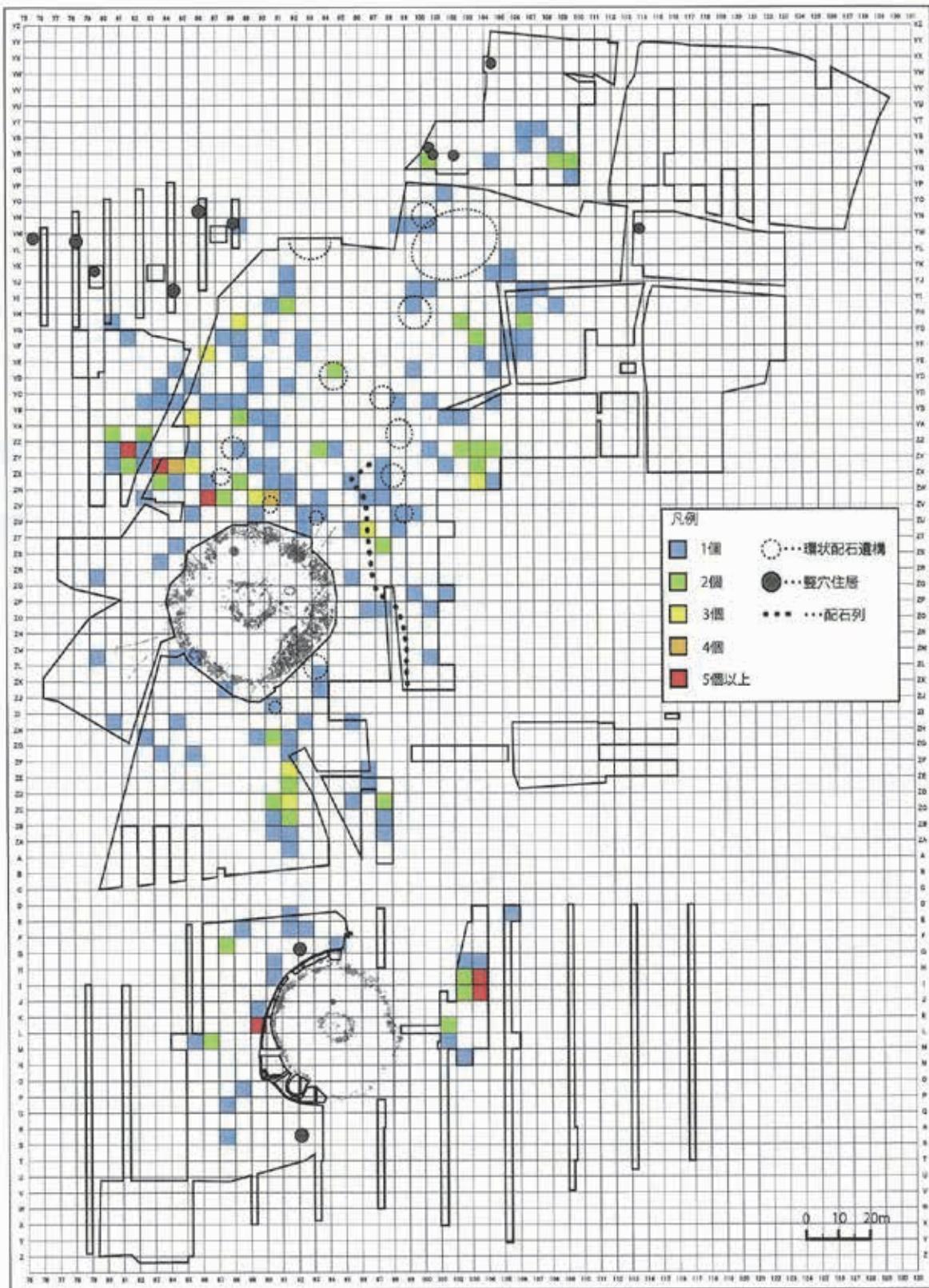
第 135 図 三脚石器分布図



第136図 打製石斧分布図



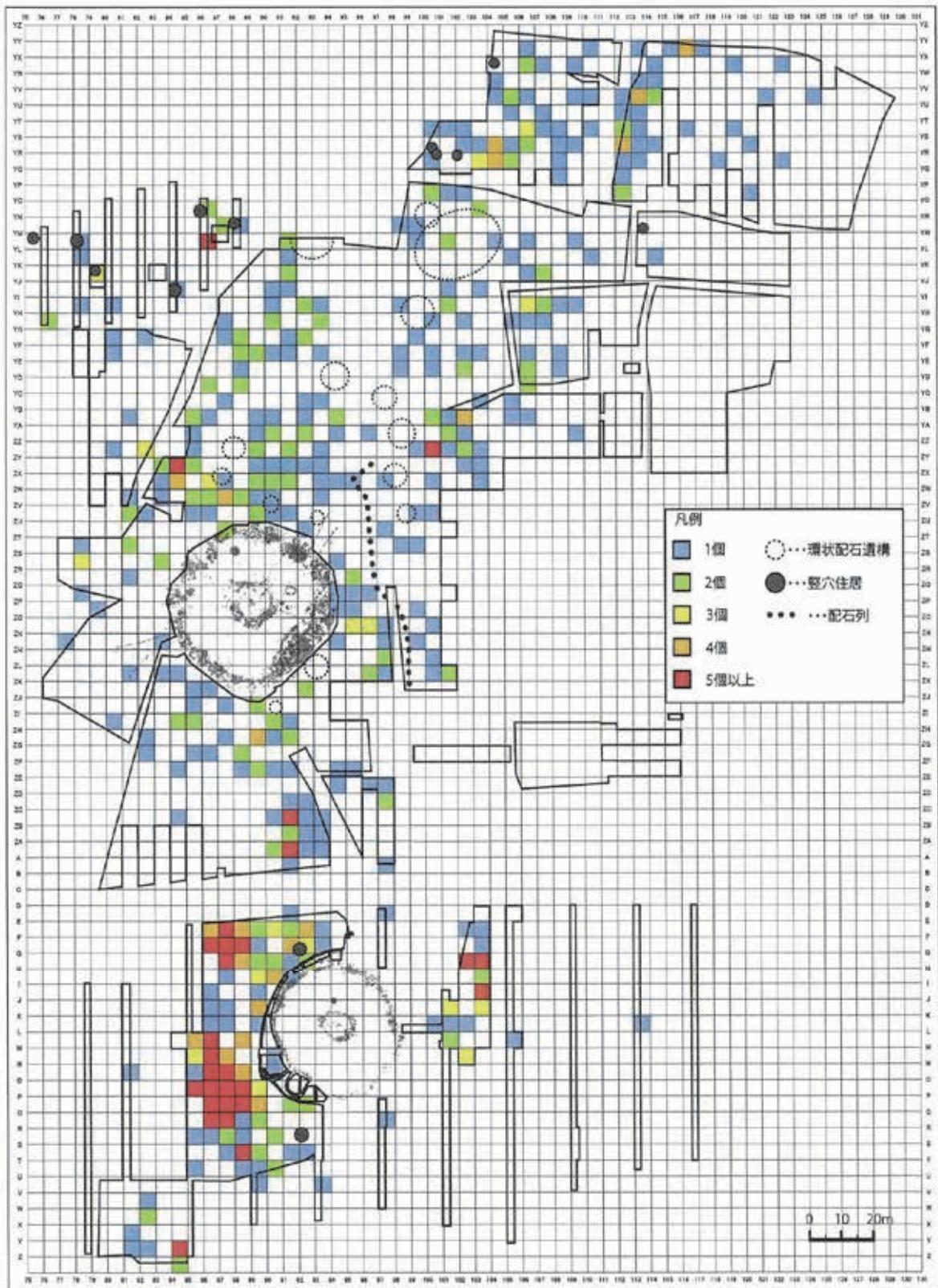
第137図 磨製石斧分布図



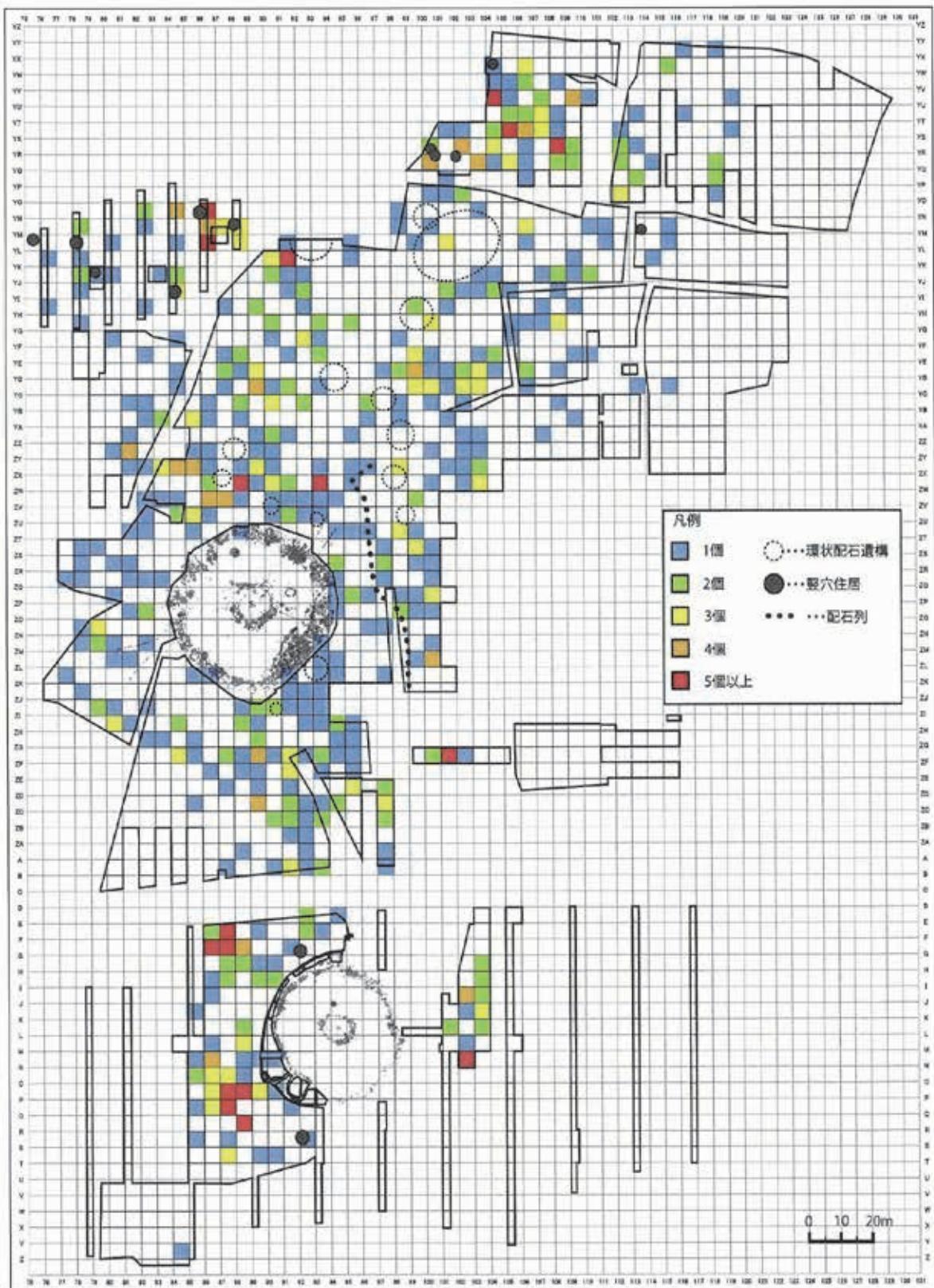
第138図 石錐分布図



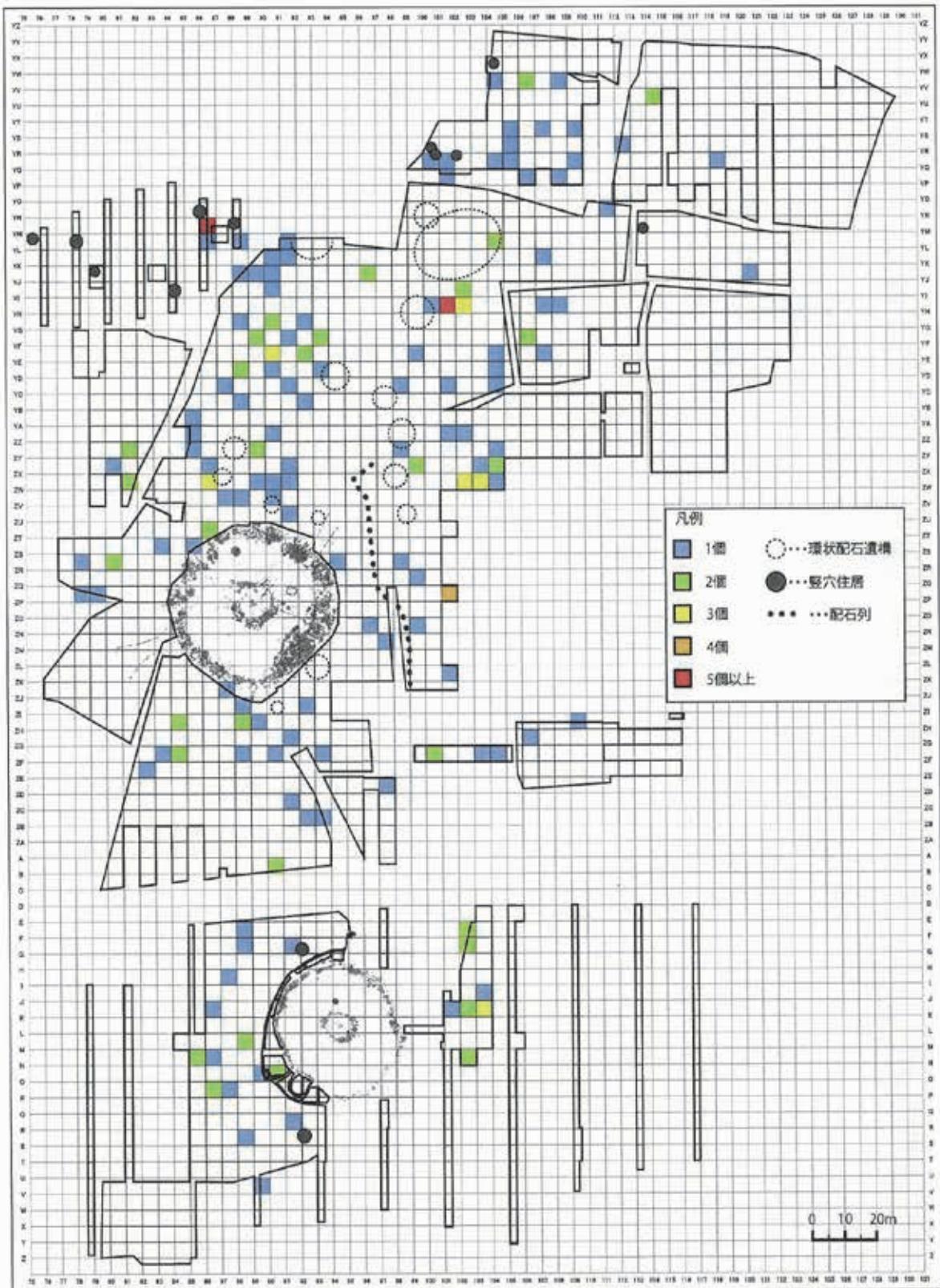
第 139 図 敲石分布図



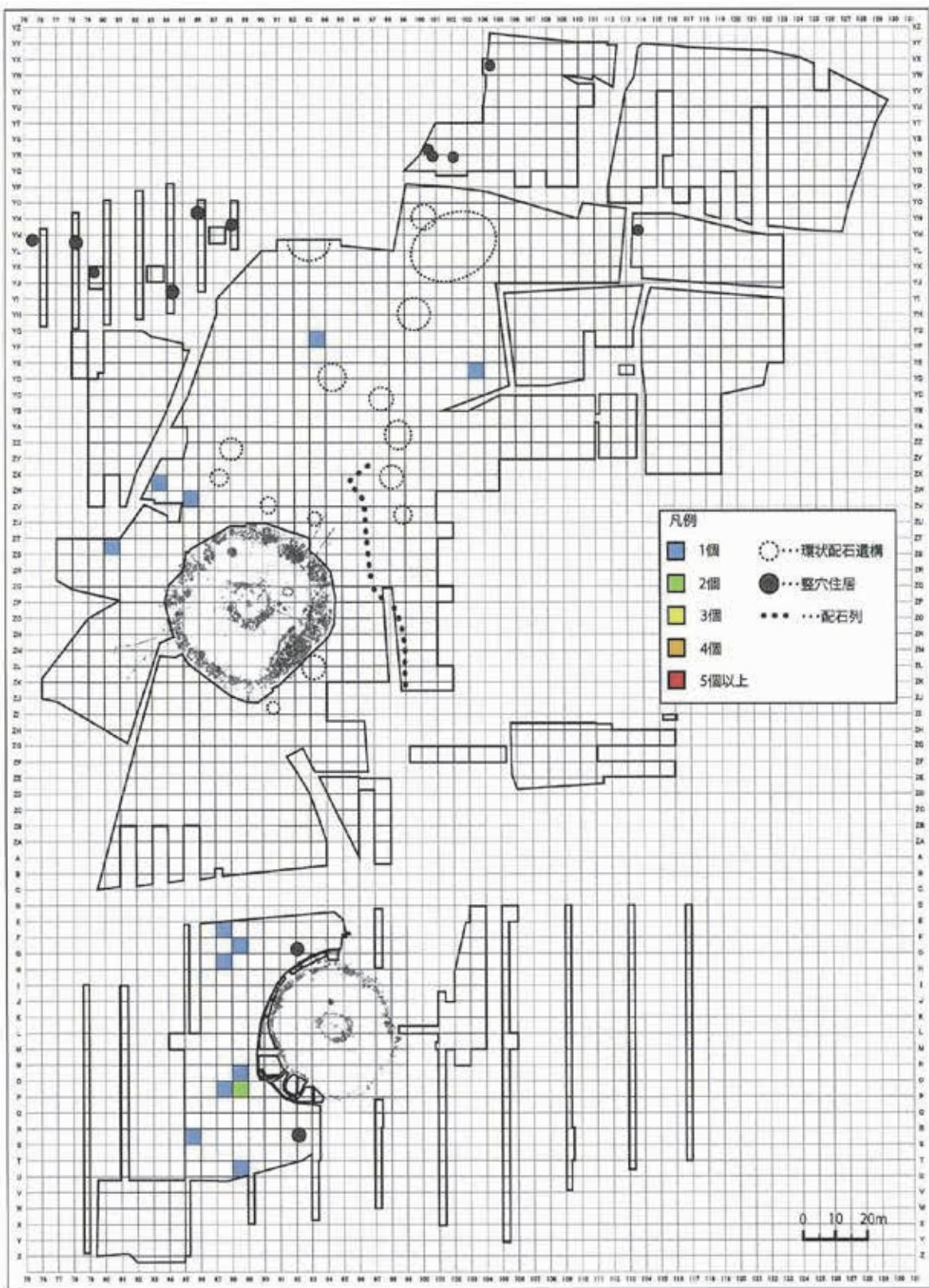
第140図 回石分布図



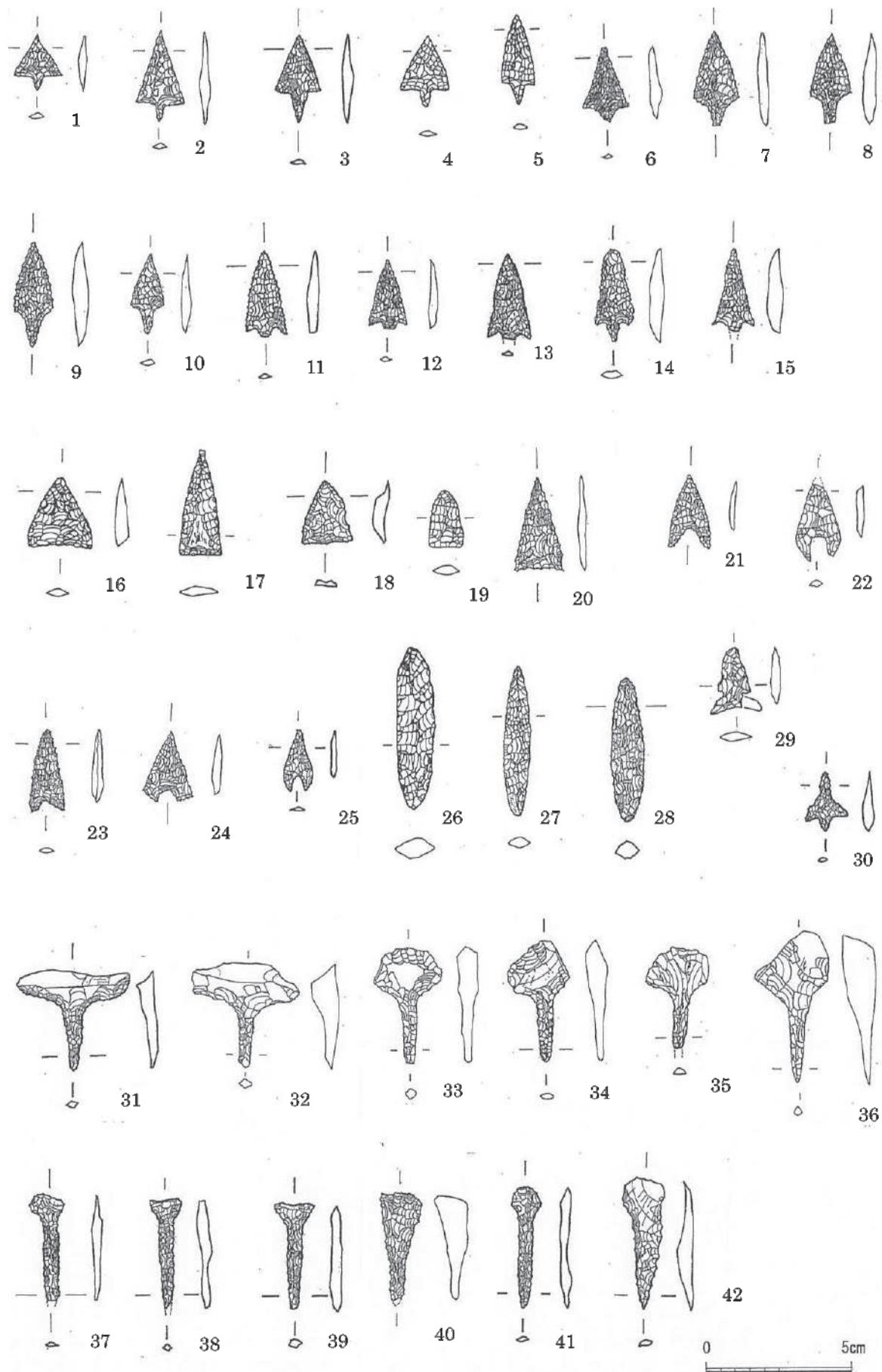
第 141 図 磨石分布図



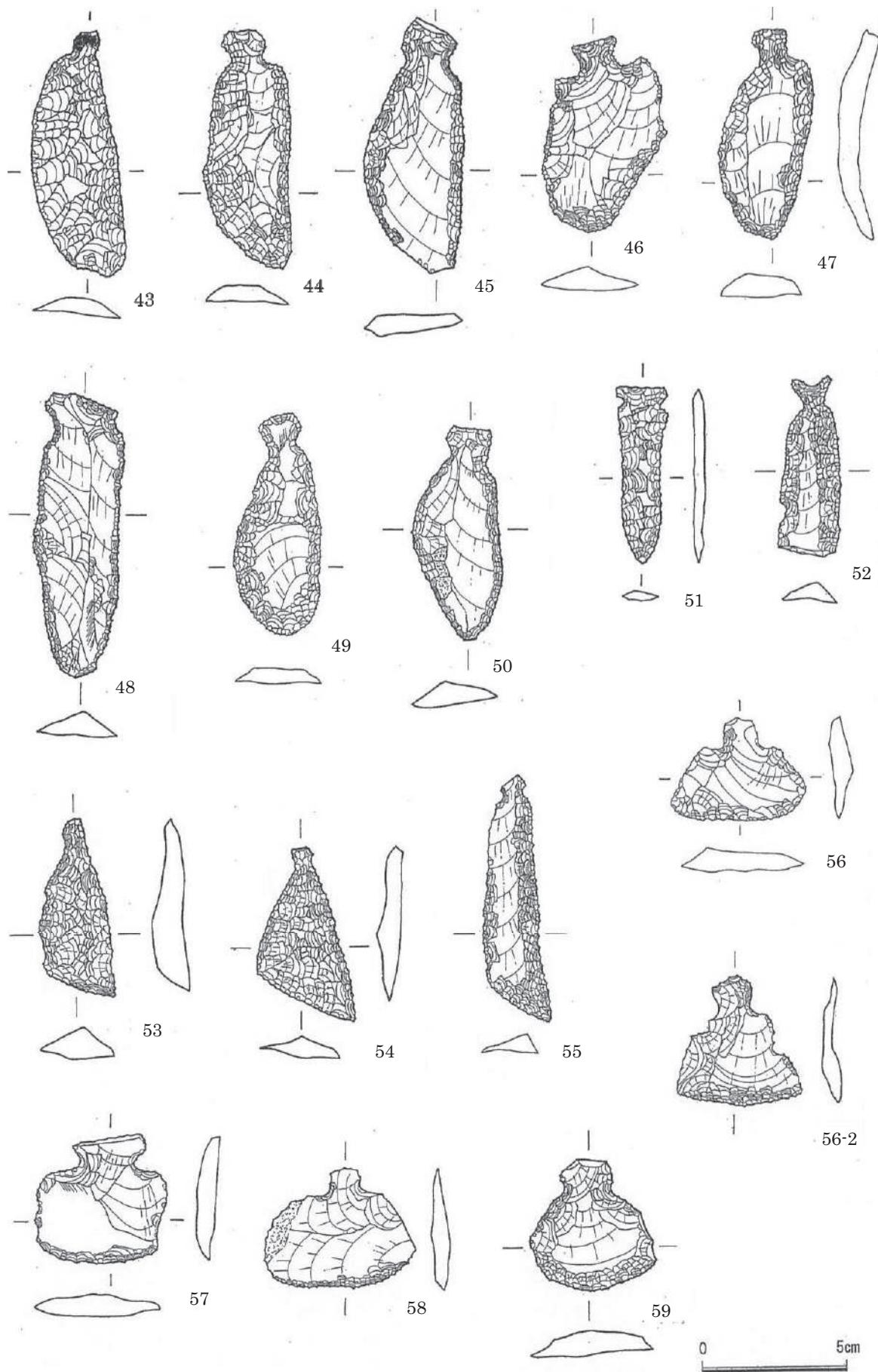
第142図 石皿分布図



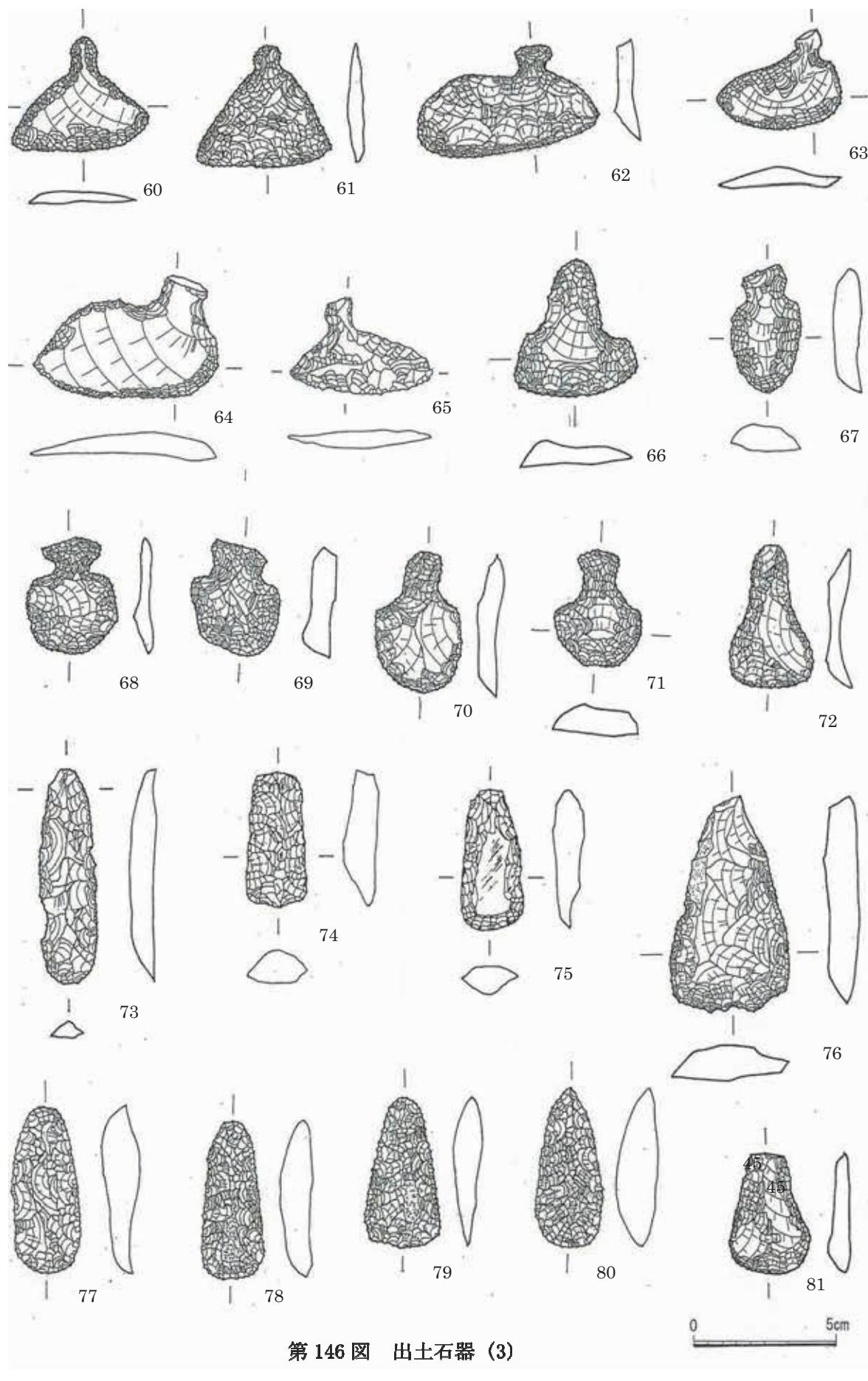
第143図 砥石分布図



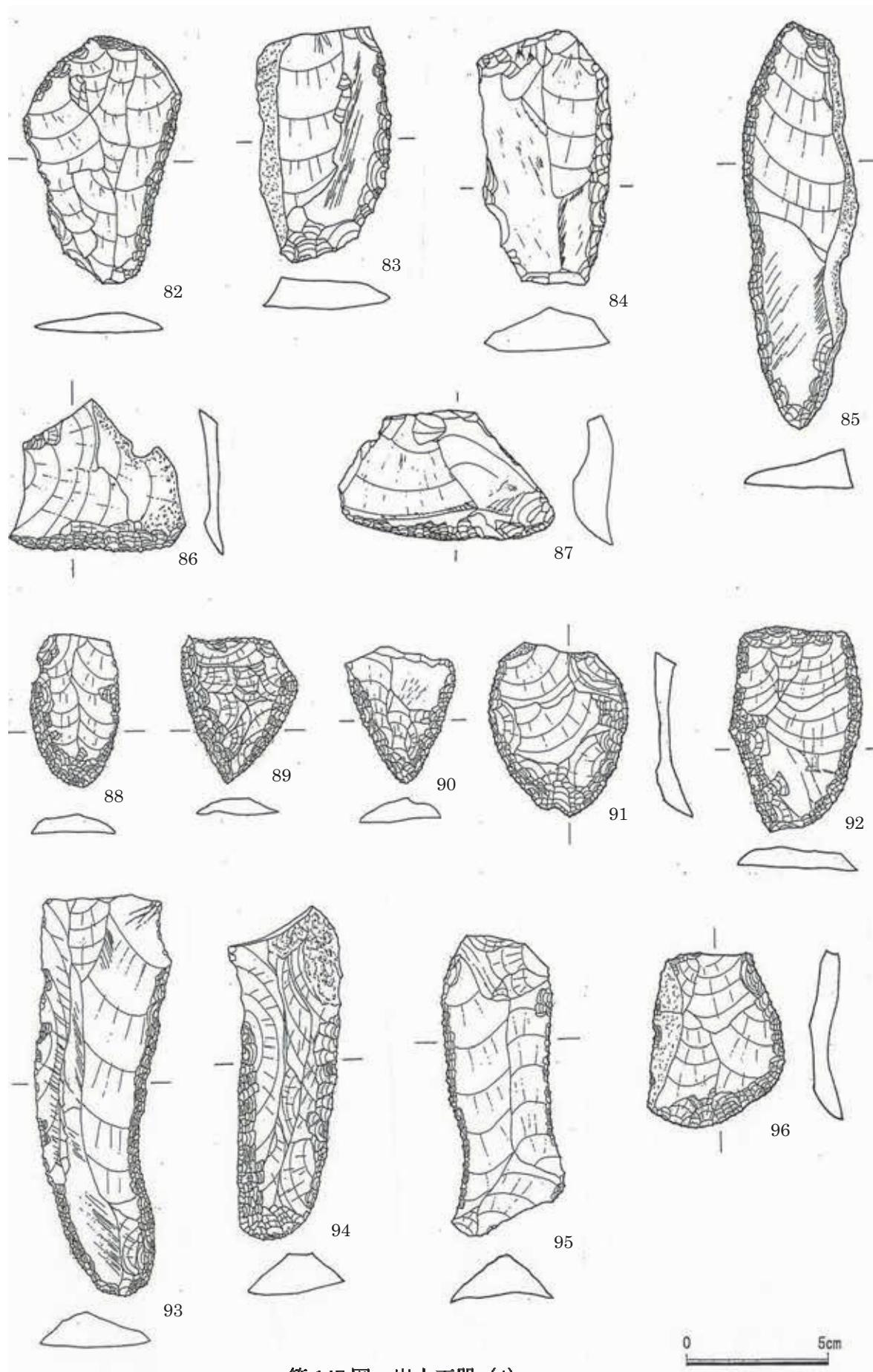
第144図 出土石器 (1)



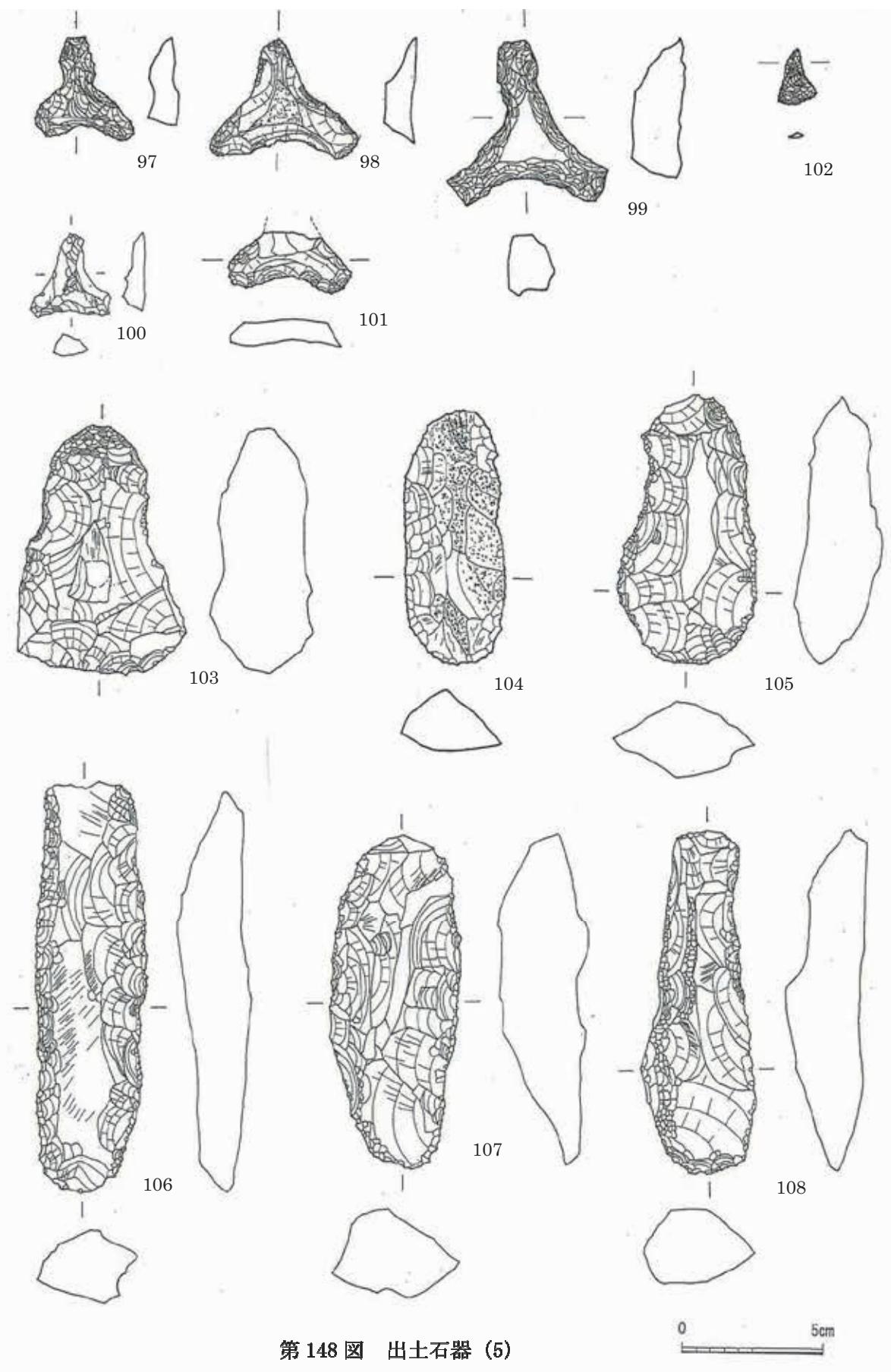
第145図 出土石器(2)



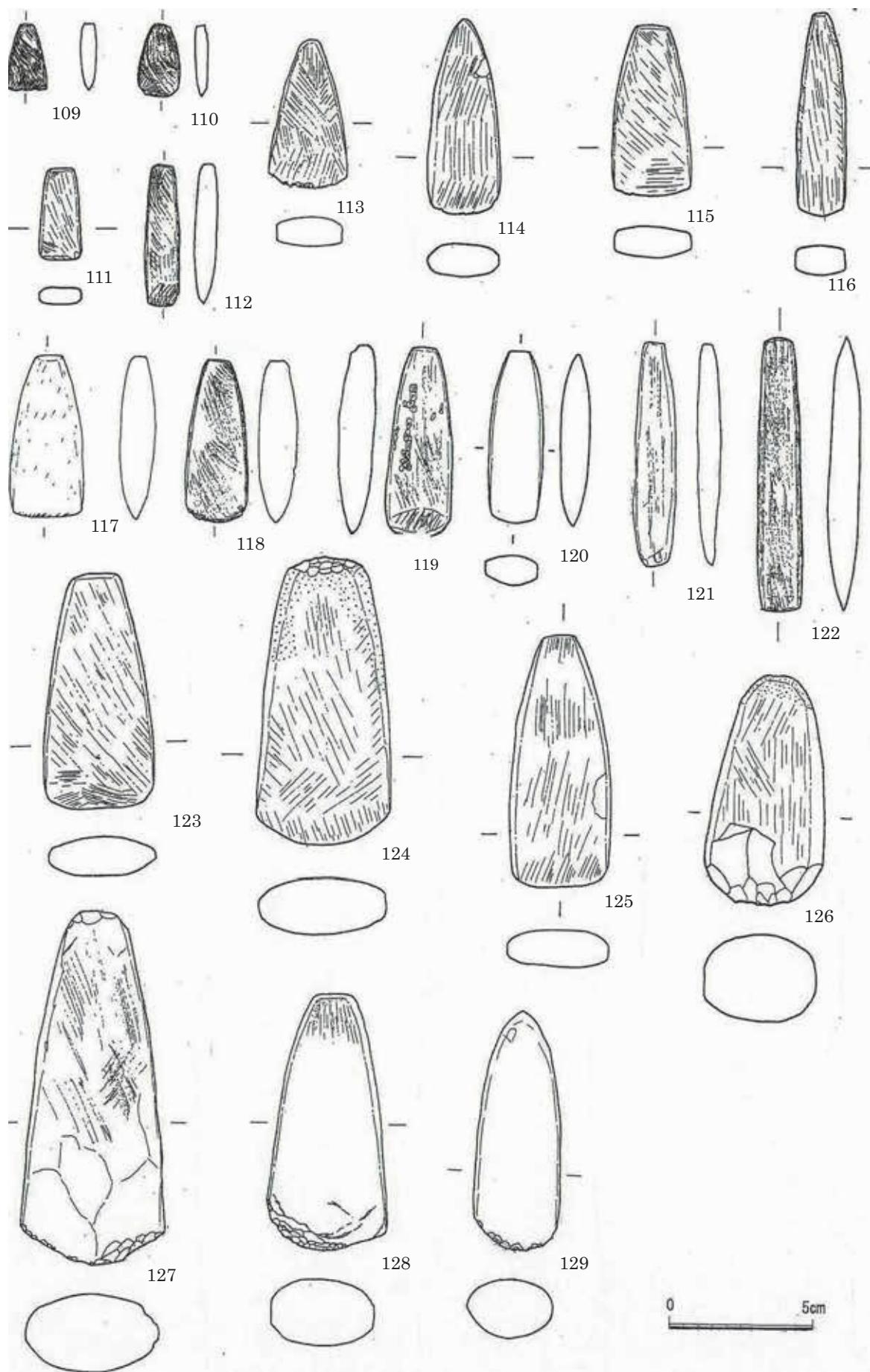
第 146 図 出土石器 (3)



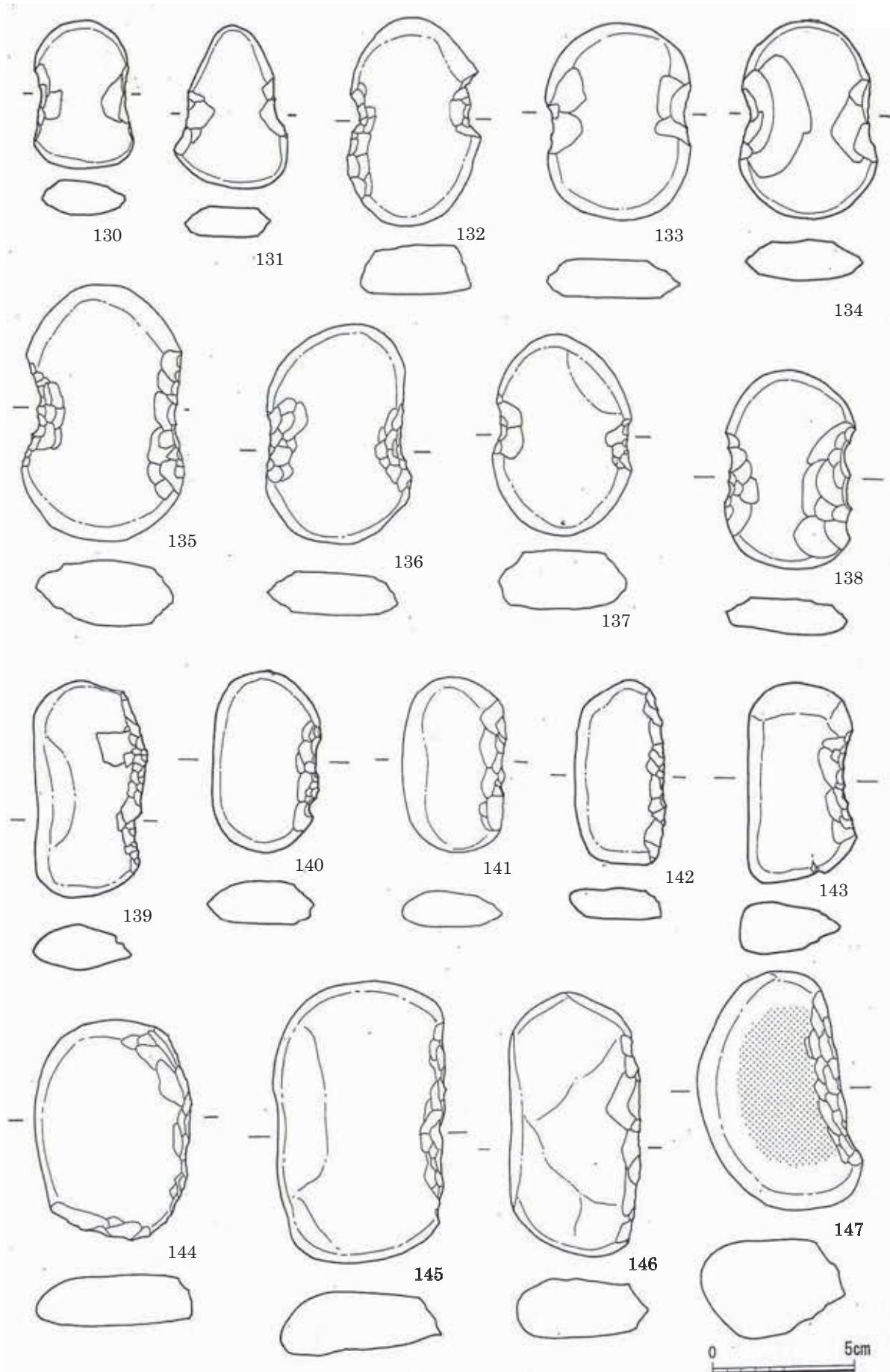
第147図 出土石器(4)



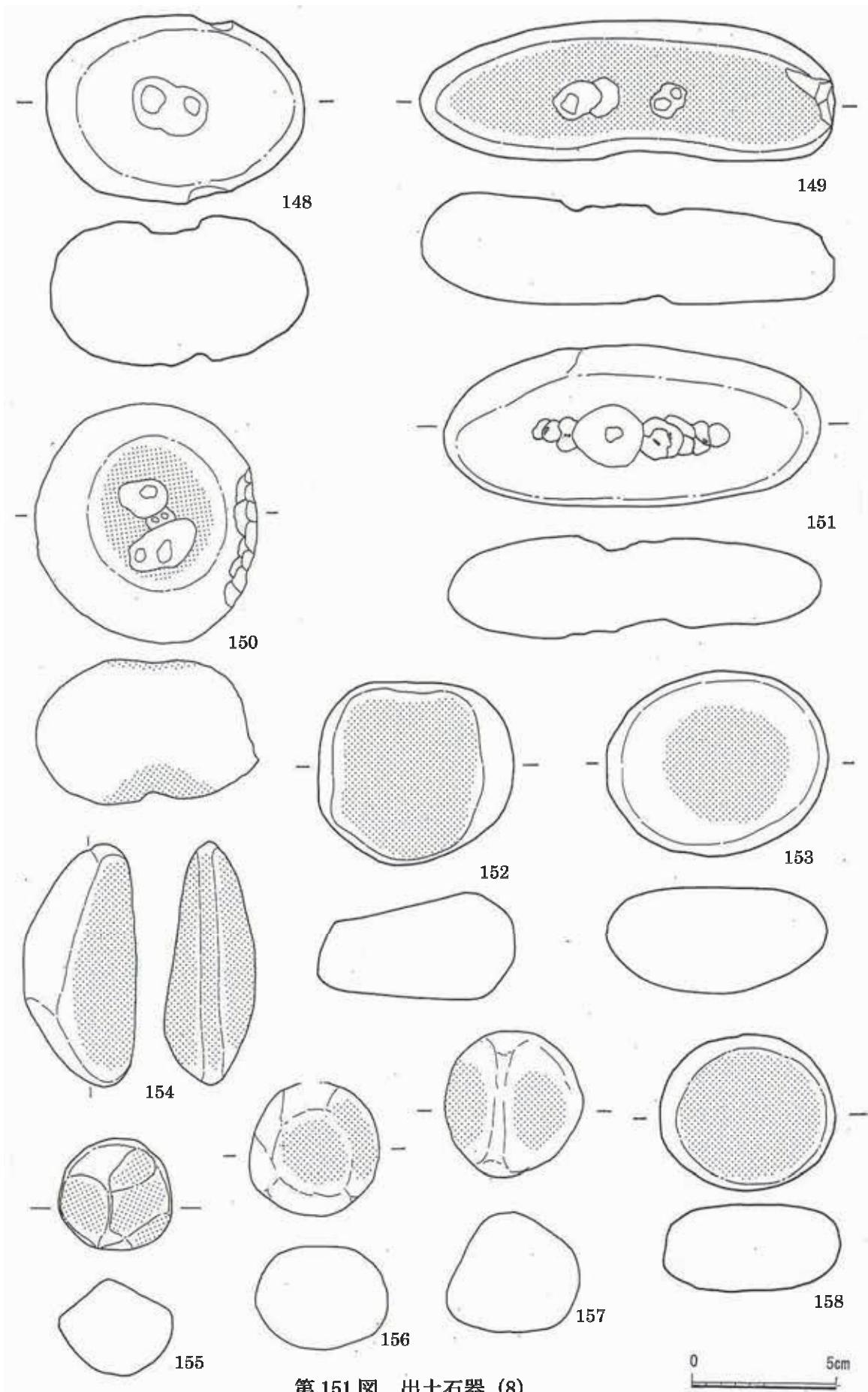
第148図 出土石器(5)



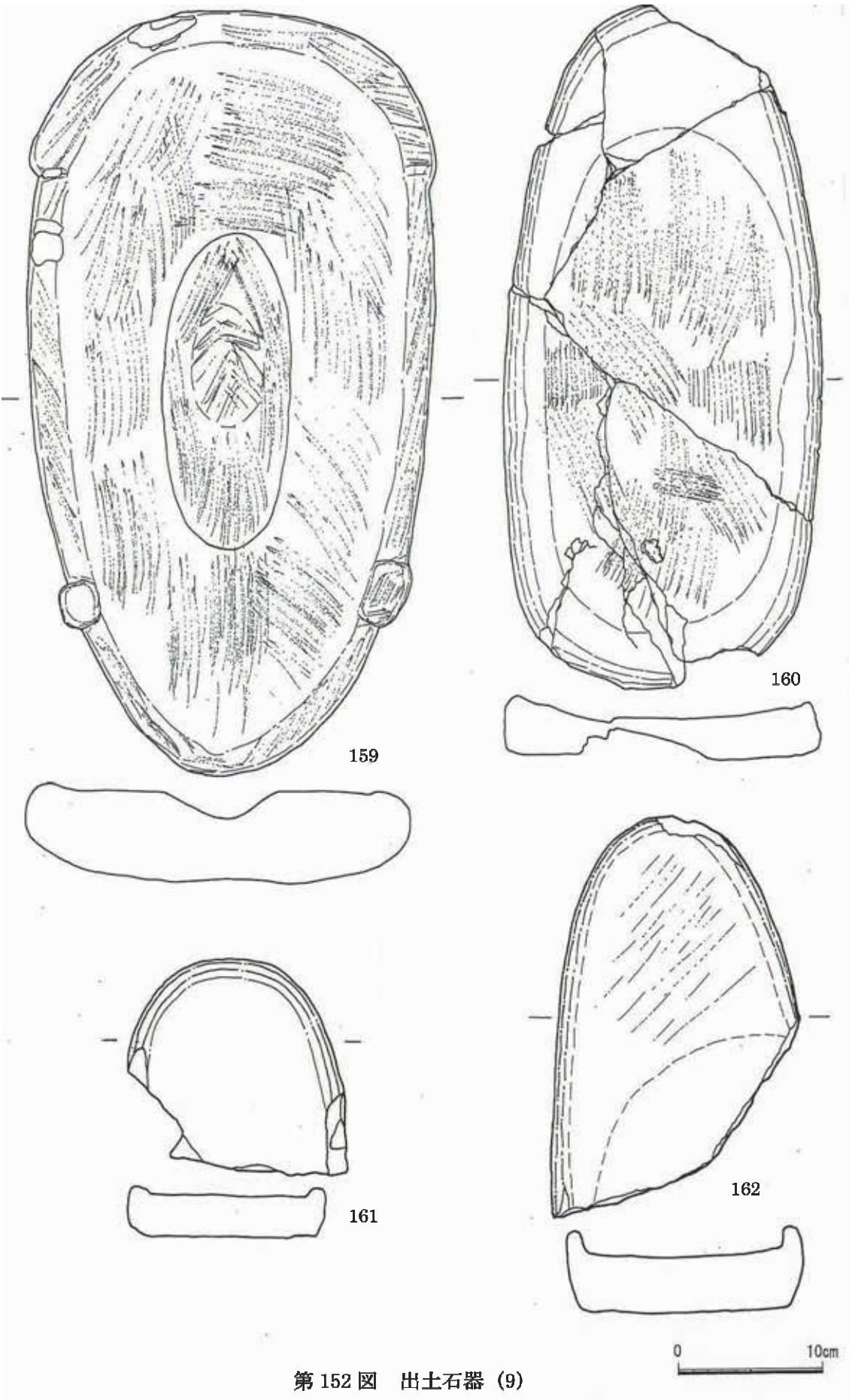
第149図 出土石器(6)



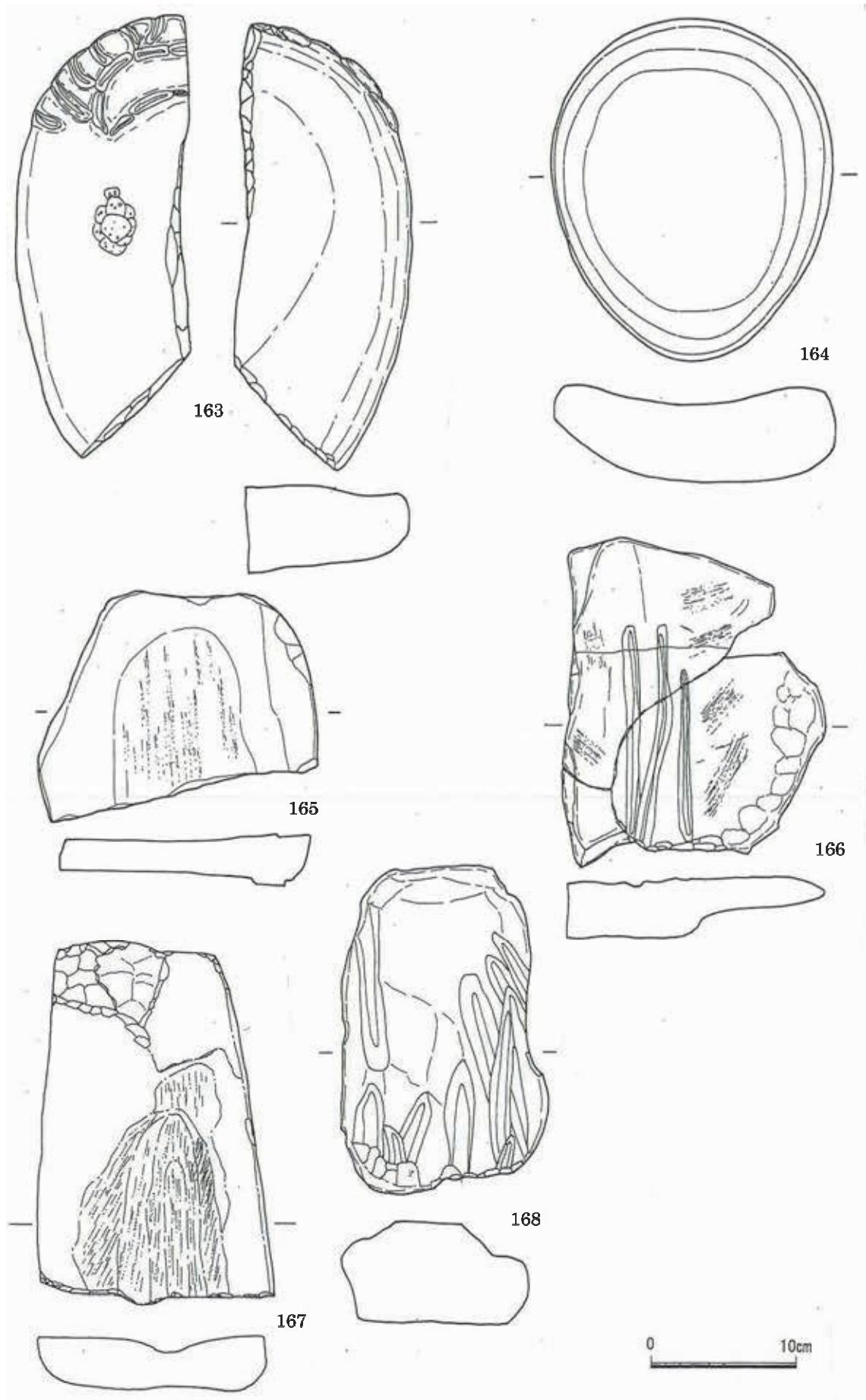
第150図 出土石器(7)



第 151 図 出土石器 (8)



第 152 図 出土石器 (9)



第153図 出土石器(10)

③ 土製品(第 154 図～180 図)

6,029 点が出土した。土偶、土版、足形付土製品、耳栓、有孔土製品、環状土製品、鐸形土製品、キノコ形土製品、動物形土製品、スタンプ状土製品、円盤状土製品、三脚土製品、土錘、皿状土製品、土器片利用土製品の 15 種類からなる。土器片利用の円盤状土製品が圧倒的に多く、鐸形土製品、土偶、有孔土製品と続く。

土 偶 (第 154 図、162 図 1～166 図 42)

179 点が出土した。遺構内出土は 15 点である。分布は万座・野中堂地区、万座北側地区の環状配石遺構群や台地北側住居跡群周辺が多く、遺構の文武が希薄な遺跡西端で出土する例もある。また、大型中空土偶は万座環状列石内やその周辺、万座北側地区に限られる。

形態から次のように分類できる。

I 類：板状土偶である。頭部、胴部は逆三角形を呈し、腕・脚の表現がなく、乳房、臍、肋骨と腹部の境が明瞭に表現される。文様は格子状の沈線文、連続した曲線文で正中線が表現される。刺突文や縄文の施文は見らない。

II 類：板状を呈し、頭部のほか腕・脚が付き立体的な土偶となる。顔つきは I 類に類似する。

I 類の文様を引き継ぎ採用するが、胴部下半に限定されてくる。

III 類：I 類、II 類と比べ立体的となり、腹部に張りをもつ土偶となる。目・鼻・口が明確に表現される。I 類・II 類と比較し僅かに大きくなる傾向にある。胴部・腕・脚は明確となり、手の平を表現するものもある。30 は頭なし土偶である。文様は肩から手首にかけて刺突文が施文され、乳房の間には正中線が刺突文で表現される。

IV 類：中空土偶である。166 図 42 は額の上に大きなコブ状のものが表現され、獣的な顔つきが特徴的である。土偶全体を知ることができる資料がないが、腕・脚とも大型化し、空洞化する。沈線で肩と腕、胴部と脚の境を表現するものや、装飾的に三角形文を付加するものもあり、細かな縄文を充填する。

土 版 (第 166 図 43)

野中堂環状列石北側の外帶から 20m 程の地点(B1 区 L-101)から 1 点出土した。表面には刺突を一つずつ増やし、口・目・乳房・正中線を、裏面に耳を簡素に表現している。下半部には沈線で方形文が区画され、LR 縄文が充填される。その文様は裏側まで続き、フンドシのような表現となっている。下端中央には陰部を表現したと思われる深さ 2.1 cm の孔がみられる。

足形付土製品 (第 166 図 44～45)

3 点出土した。明瞭に足形の押圧を判別できるものは 1 点である。いずれも万座地区から出土した。かかと部分に孔が穿たれる。上面に沈線で渦巻き文を施文するものがある。

スタンプ状土製品 (第 167 図 46～49)

4 点出土した。すべて遺構外出土で、分布は万座地区西側に限られる。スタンプ面には沈線によって文様が施文される。

耳 桁（第 155 図、167 図 50～71）

耳飾りと言われているもので 45 点出土した。遺構内出土は 7 点である。分布範囲は土偶に類似する。遺構の希薄な地区からも出土している。

直径 1.5 cm～2 cm 程で、側面に沈線を巡らし赤色顔料を塗布するもの、無文地に赤色顔料を塗布するものがある。

有孔土製品（第 156 図、167 図 72～169 図 132）

73 点出土した。遺構内出土は 15 点である。分布範囲は万座地区、同北側地区に偏在する傾向がみられ、野中堂地区は希薄である。

形状は球状、棒状、円盤状、ツツミ状を呈し、孔が穿たれている。無文のものが多いが沈線や刺突文が施文されるものがある。

環状土製品（第 169 図 133～170 図 146）

28 点出土した。遺構内出土は 6 点である。環径が太いものと細いものがある。分布範囲は万座・野中堂地区、万座北側地区である。

環部が太いものは沈線や刺突文で文様が施され、137 は完形で沈線によって文様が施されている。

鐸形土製品（第 157 図、171 図 147～174 図 229）

229 点出土した。遺構内出土は 21 点である。分布は万座・野中堂地区、万座北側地区の環状配石遺構群や台地北側の住居跡群を取り囲むように分布する。

側面形状は球形、砲弾形、三角形等違いが認められる。また、開口部が円形をした和鐘形のものと、開口部が楕円形をしたカウベル状ものがある。頂部は摘み出され、横方向に孔が穿たれるが、頂部を造らず直接鐸部に臥孔するものもある。無文のものが多いが無文、有文を問わず調整、焼成は良好である。有文のものは沈線文あるいは沈線文と刺突文を組み合わせたものが多く、帶縄文が施されたものは 1 点のみである。沈線や刺突によって縦方向あるいは横方向に文様帯を区画し、曲線文や渦巻文、入組文などを充填施文している。開口部が楕円形をした扁平なものの中には、側面をつまみだし、刺突や刻み目によって文様を施しているものもみられる。開口部が円形のものが切れ間なく全面に文様を施しているのに対し、開口部が楕円形のものは、明らかに正面と側面と区別した文様が施され、正面を意識した文様構成になっている。内面に煤状炭化物が付着するものが数点見受けられる。

円盤状土製品（第 175 図 230～234）

4 点出土した。円盤状を呈したもので沈線や刺突文によって施文される。土器片利用土製品とは製造工程が異なり、打ち欠きや研磨等は行われない。

キノコ形土製品（第 158 図、175 図 230～176 図 256）

48 点出土した。遺構内出土は 5 点である。分布は土偶や鐸形土製品に類似する。

形状はかさの大きいもの、小さいもの、脚が細長いもの、太いものなど違いが見られる。

土 錘（第 159 図、176 図 257～263-2）

8 点出土した。いずれも遺構外出土で、万座・野中堂地区に集中する。沈線を巡らし、側面に貫通する孔を入れるものがある。

動物形土製品（第 177 図 264～270）

7 点出土。すべて遺構外出土である。単体として作られたもののほか土器内部や突手として張り付けられたものがある。出土地点は北側台地縁、万座環状列石周辺に限られる。

土器片利用土製品（第 160 図、178 図 271～179 図 307）

5,077 点出土した。遺構内出土は 693 点である。万座・野中堂地区、万座北側地区の環状配石遺構周辺、5 本柱建物跡周辺からもまとまって出土しているほか、万座地区西側や野中堂地区北側では 20～40 点と集中して出土するグリッドもある。遺構では B 区第 106・107 号フラスコ状土坑のように 26 点とまとめて出土する例もみられる。

平面形態から 3 群に分類できる。

I 群…円形を呈するもの。3,327 点が出土し、全体出土量の 65% を占める。

II 群…三角形を呈するもの。1,608 点出土。

III 群…方形を呈するもの。142 点出土。

破片の側面全体に研磨が見られるものは少なく、一部のみを研磨しているものが多い。土器胴部破片が多く利用され、無文や地文のみのものが多い。後期中葉の土器文様の特徴をもつものはさらに少ない。

三脚土製品（第 179 図 308～315）

12 点出土した。万座・野中堂地区、万座北側地区の環状配石遺構群周辺から出土している。三つの角を支え(脚)とするアーチ状の形をしている。形状としては土器片利用土製品の II 群に類似するが、土器の破片を二次利用するのではなく粘土から成形されていることから、異なるものとした。また、三辺がくびれ三脚石器と似た形状をもつものもある。

皿状土製品（第 179 図 316）

石皿状の土製品である。1 点出土した。万座環状列石東側隣接地から出土した。

ミニチュア土器(第 161 図、180 図 317～341)

308 点出土。遺構内出土は 29 点である。分布は万座・野中堂地区及び万座北側地区の環状配石遺構群を取り囲む範囲である。器形は壺形、深鉢形、鉢形、片口、台付、コーヒーカップ形、蓋等バラエティーに富んでいる。無文のものが多いが、横位・縦位に展開する波線文・弧線文、曲線文が施文されたものが存在する。

第 28 表 土製品組成の比較

遺跡名/種別	土偶	土版	足形付 土製品	耳栓	有孔 土製品	環状 土製品	鏃形 土製品	キノコ形 土製品
大湯環状列石	179 3.00%	1	3	45	73	28	229 3.80%	48
伊勢堂岱遺跡	196 3.90%	1	1	17	3	25	106	32
小牧野遺跡	42	0	2	7	18	9	57	4
天戸森遺跡	2	0	0	0	1	3	1	0

遺跡名/種別	動物形 土製品	スタンプ 状土製品	土器片利 用土製品	三脚 土製品	土鍤	皿状 土製品	靴形 土製品	床状 土製品
大湯環状列石	7	4 84.2%	5077	12	8	1	0	0
伊勢堂岱遺跡	6	2 43.4%	2187	10	1	0	0	0
小牧野遺跡	2	0 60.6%	517	0	0	0	4	3
天戸森遺跡	0	5 77.7%	63	2	0	0	0	0

遺跡名/種別	円形土版	焼成 粘土塊	呼鐘状 土製品	斧状 土製品	棒状 土製品	ミニチュア 土器	蓋形 土製品	三角形 土製品
大湯環状列石	0	6	0	0	0	308 5.10%	0	0
伊勢堂岱遺跡	0 39.70%	1997	0	0	0	73	20	24
小牧野遺跡	2	87	0	0	0	0	0	0
天戸森遺跡	0	0	1	2	1	0	0	0

遺跡名/種別	渦巻状 土製品	男根状 土製品	盲孔 土製品	指輪状 土製品	籠形 土製品	その他		合計
大湯環状列石	0	0	0	0	0	0		6029
伊勢堂岱遺跡	0	2	1	1	1	135 2.7%		4841
小牧野遺跡	0	0	0	0	0	98 11.5%		852
天戸森遺跡	0	0	0	0	0	0		81

第 154 図から 161 図に土製品の分布を示した。土製品は、万座・野中堂地区及び万座北側地区の環状配石遺構群、同台地北側縁辺部の住居跡群に集中し、石器・石製品と同様の分布である。遺跡の主体・遺構密集部から離れるに従いその密度は希薄となり、一本木後口地区では土器や石器と同様に出土量が少なく土器片利用土製品 6 点の出土にとどまる。

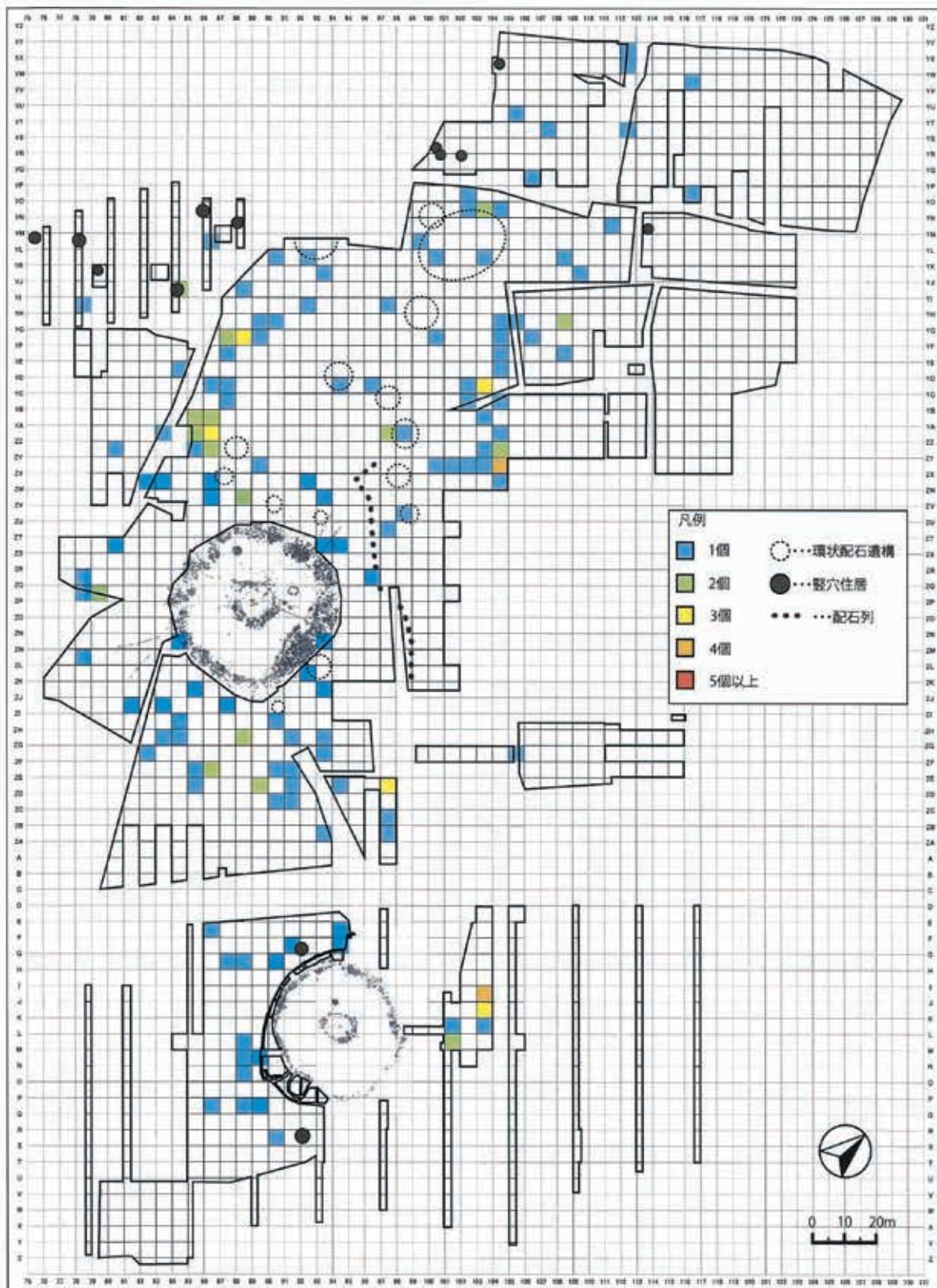
キノコ形土製品、環状土製品は万座北側地区の台地縁からは出土しないものや、土器片利用土製品のように遺構密集部と重複するように濃密に出土するものもある。

万座環状列石内出土といわれるものとして第 165 図 38 の大型土偶がある。土偶は、形状や文様等から 4 分類され、I 類は板状土偶で、伊勢堂岱遺跡や小牧野遺跡のではこのタイプが主体となる。II 類は腕や脚が作り出された板状土偶で、施文される文様は I 類を引き継ぐ。伊勢堂

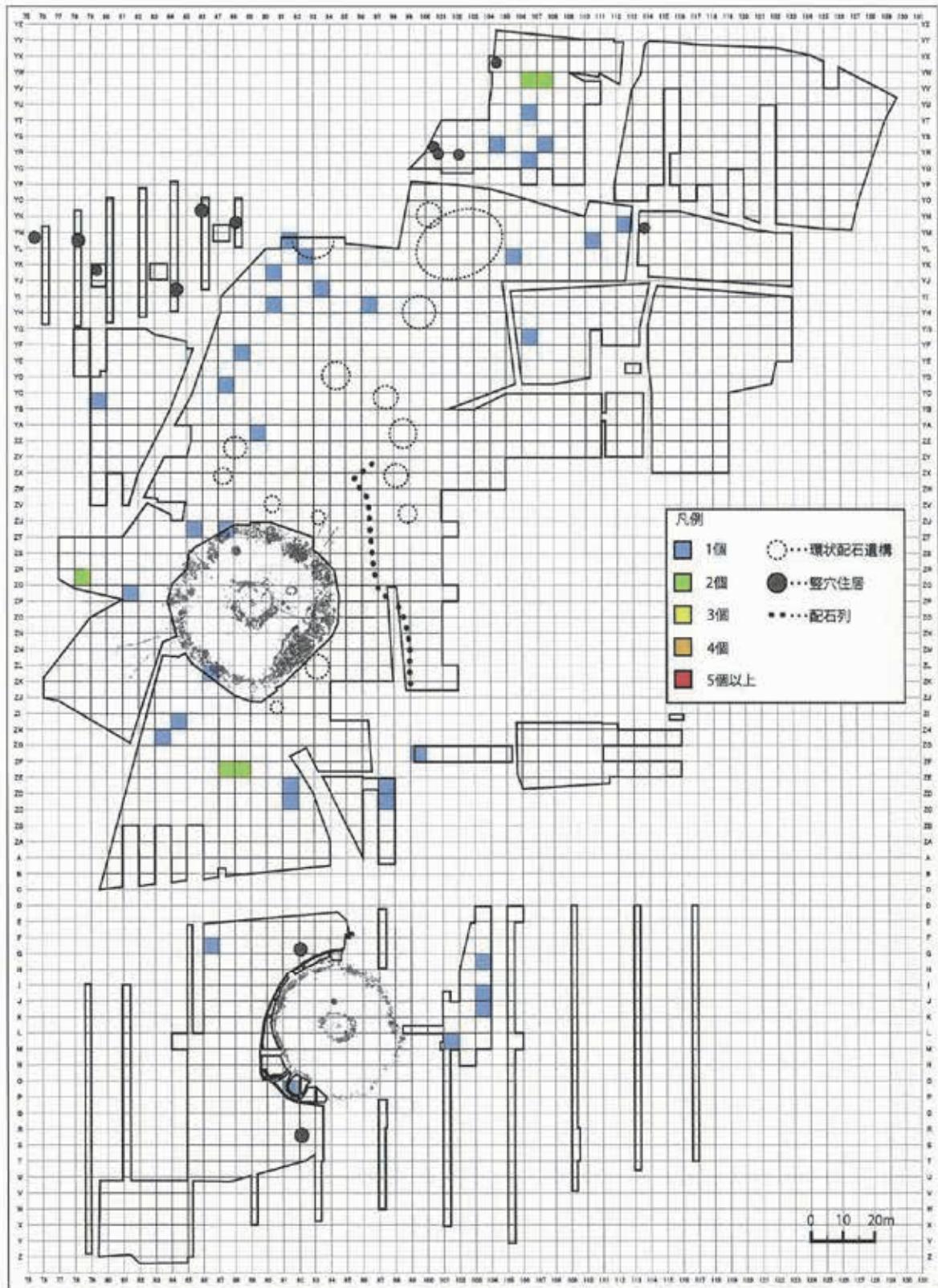
岱遺跡や小牧野遺跡では少ないタイプである。Ⅲ類・Ⅳ類は伊勢堂岱遺跡や小牧野遺跡では未検出である。Ⅲ類は膨れた乳房、腹部が特徴的である。板状土偶も伴うが刺突文が施され、文様自体が変化する。Ⅳ類は規模の大きいもの、中空土偶が主体となり、沈線と縄文を組み合わせた文様を特徴とする。土偶の完形・復元例として、Ⅰ類では伊勢堂岱遺跡、Ⅱ類では塚ノ下遺跡(大館市)のものがある。

土版は、刺突によって口・目・乳房・正中線・耳を簡素に表している。各部位は刺突を一つずつ増やしており、「数の概念」を持ち合わせていたものと考えられる。

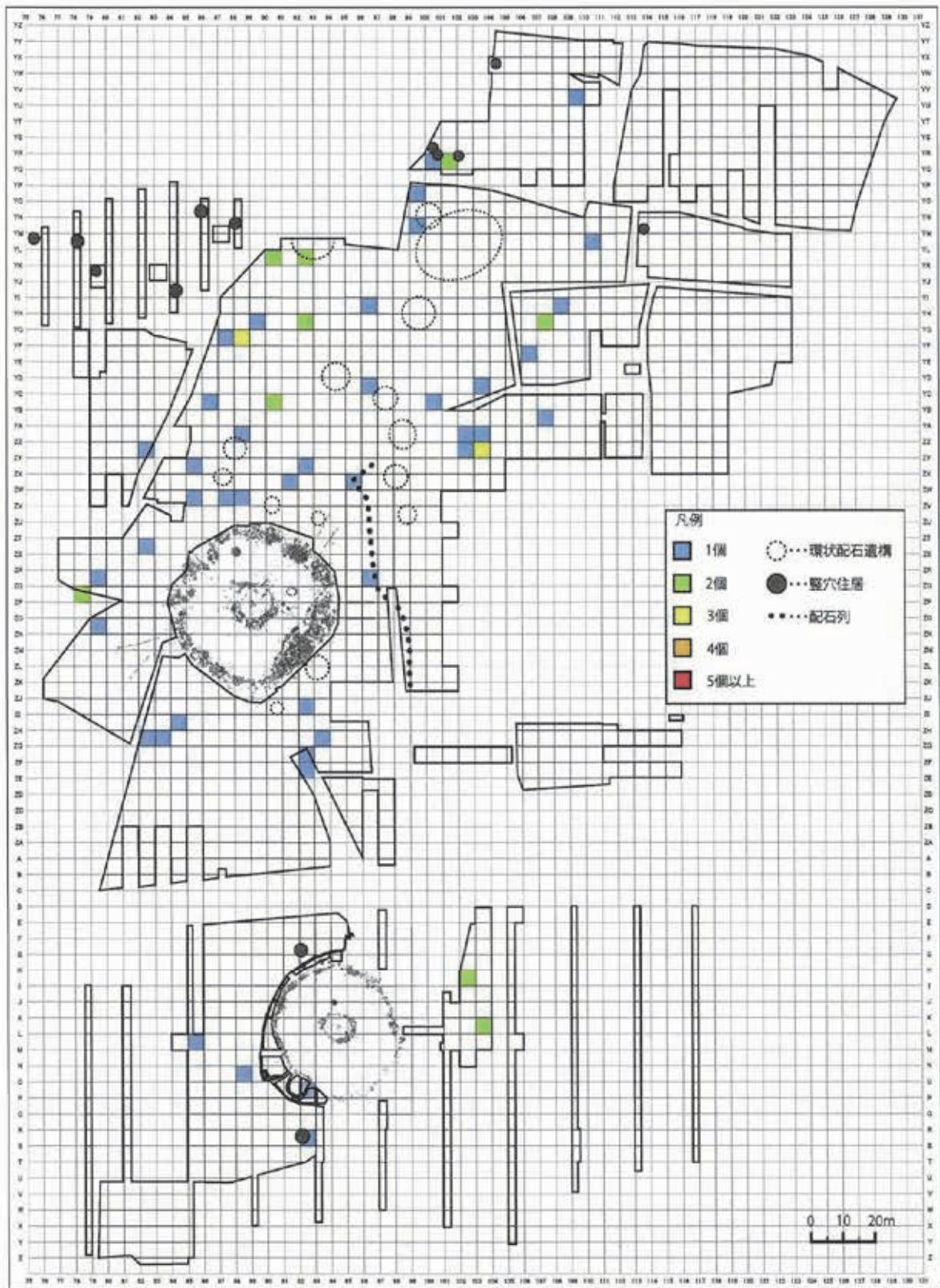
第28表に本遺跡、伊勢堂岱遺跡、小牧野遺跡、天戸森遺跡の土製品組成を示した。環状列石を主体とした遺跡から出土する土製品は多種多様であり、しかも共通して多量に出土する遺物は土偶、鐸形土製品、キノコ形土製品、土器片利用土製品で、これらは欠かすことのできない製品であったと考えられる。



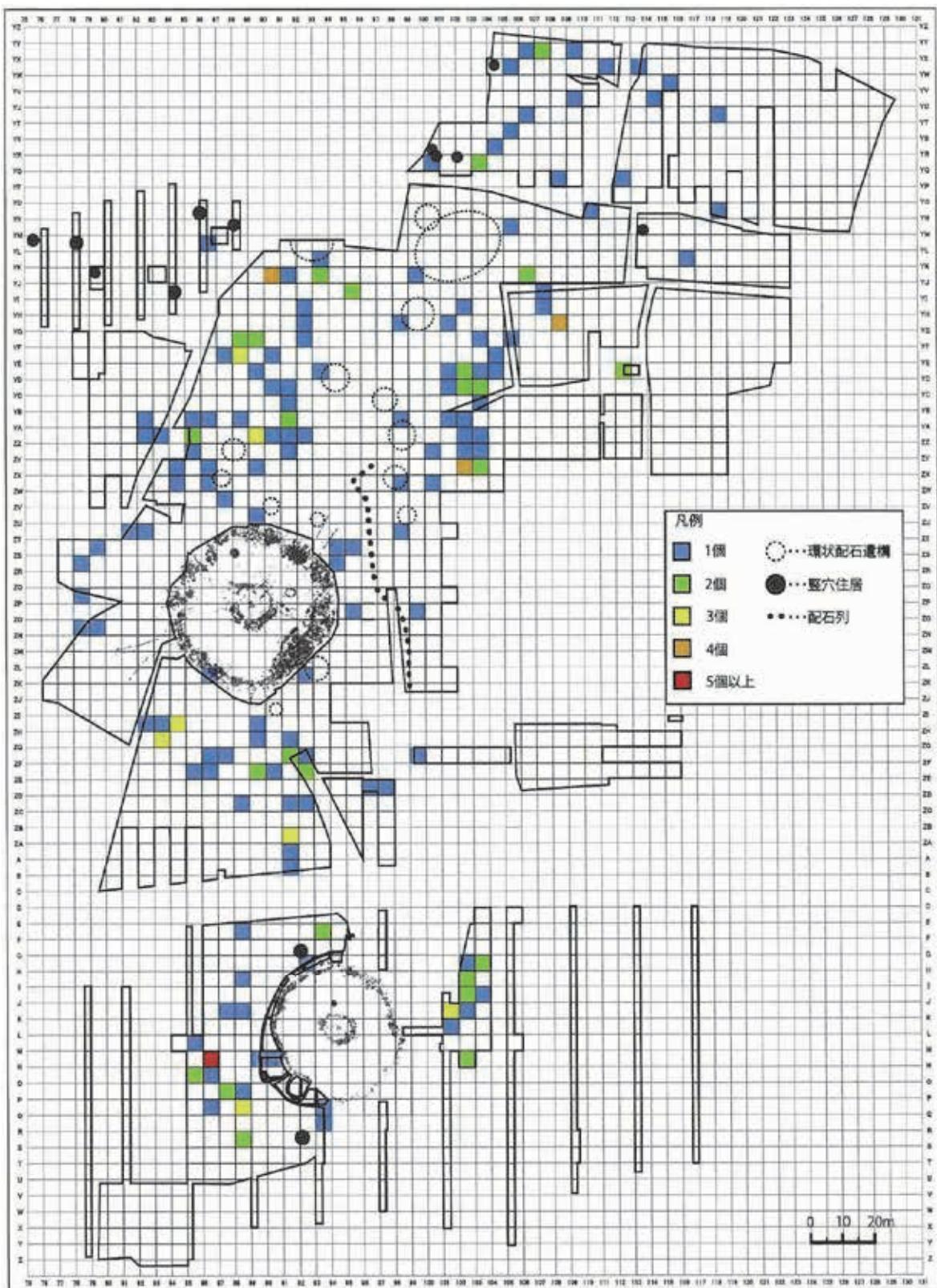
第 154 図 土偶分布図



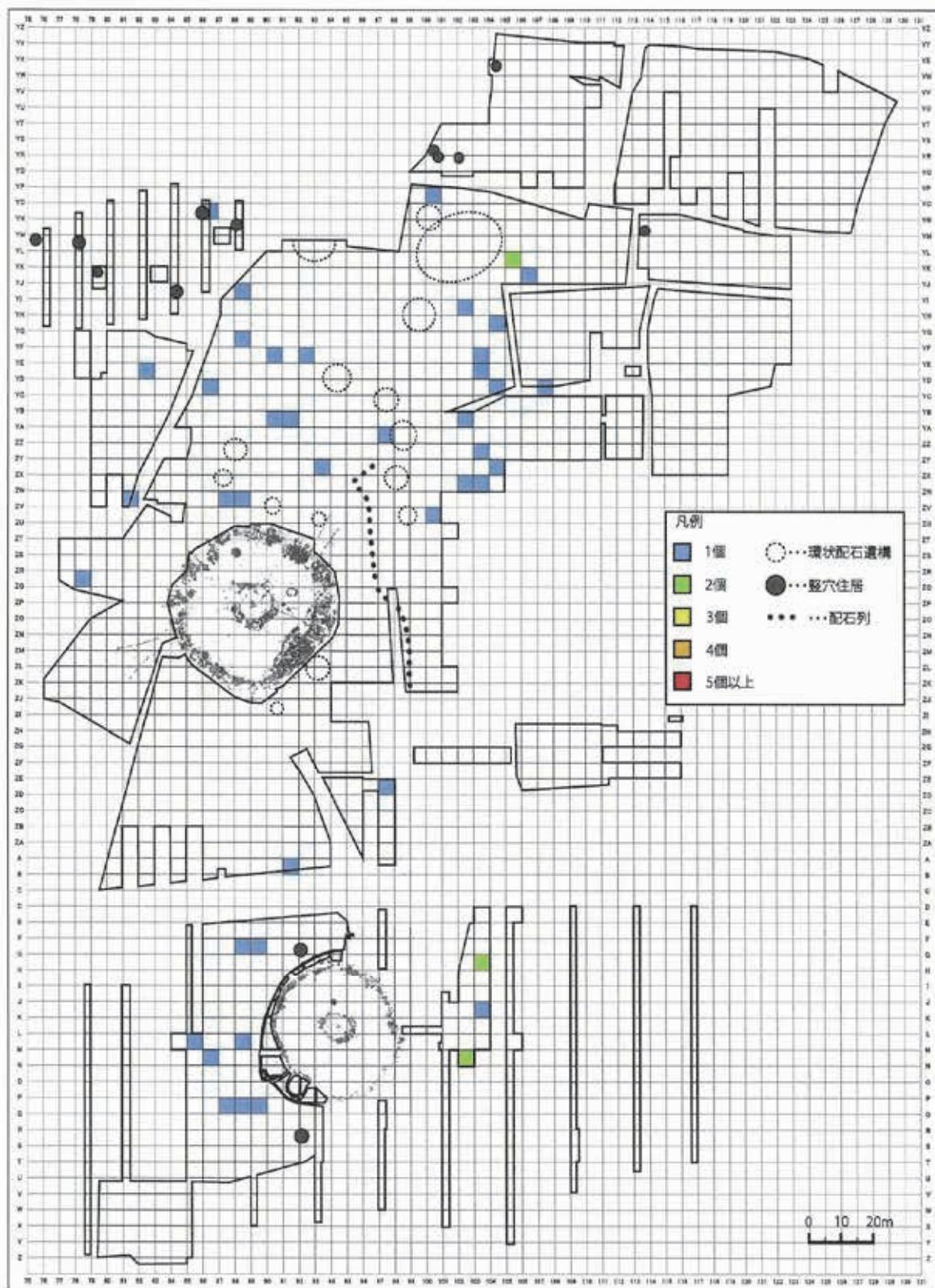
第155図 耳栓分布図



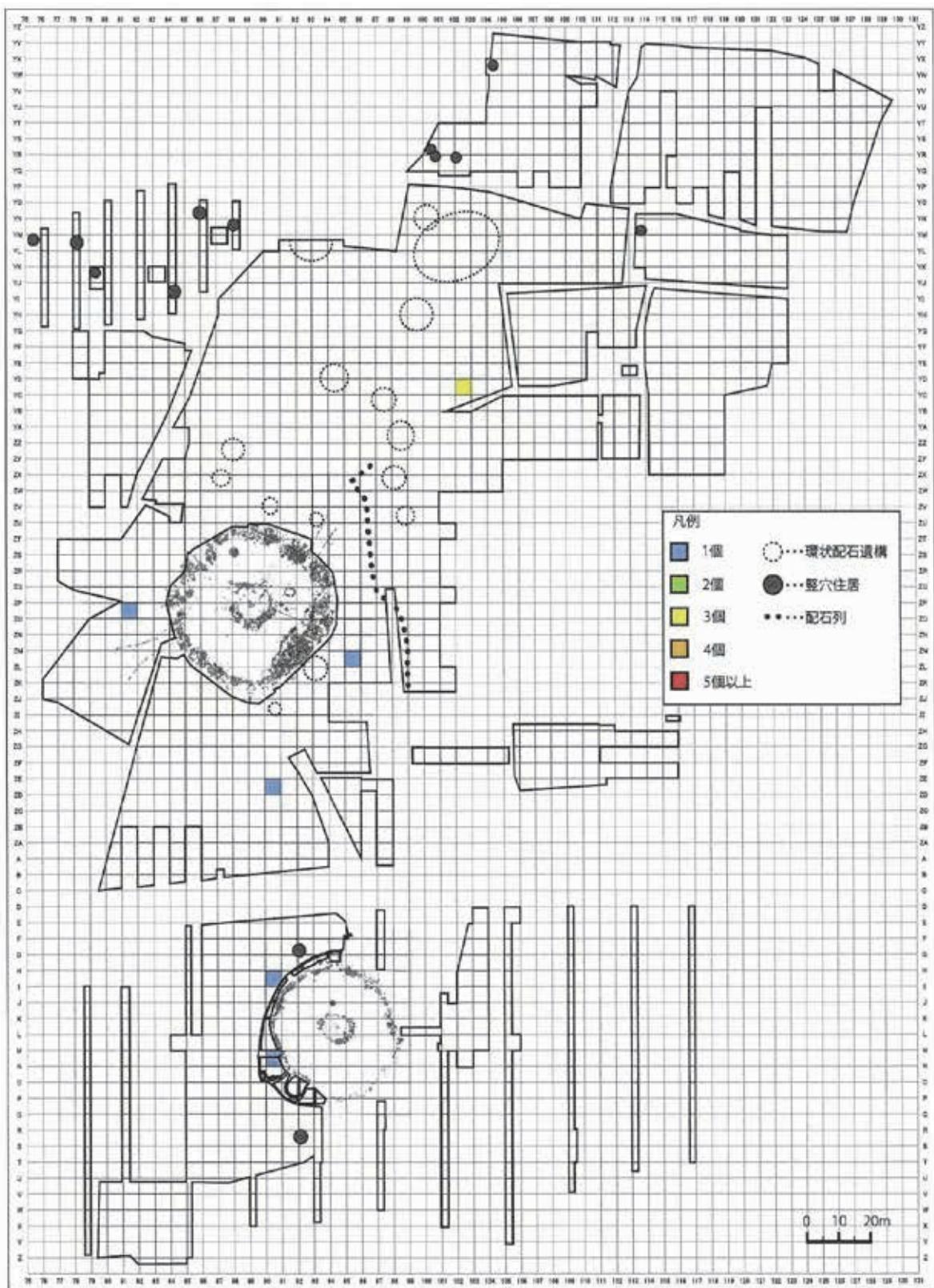
第 156 図 有孔土製品分布図



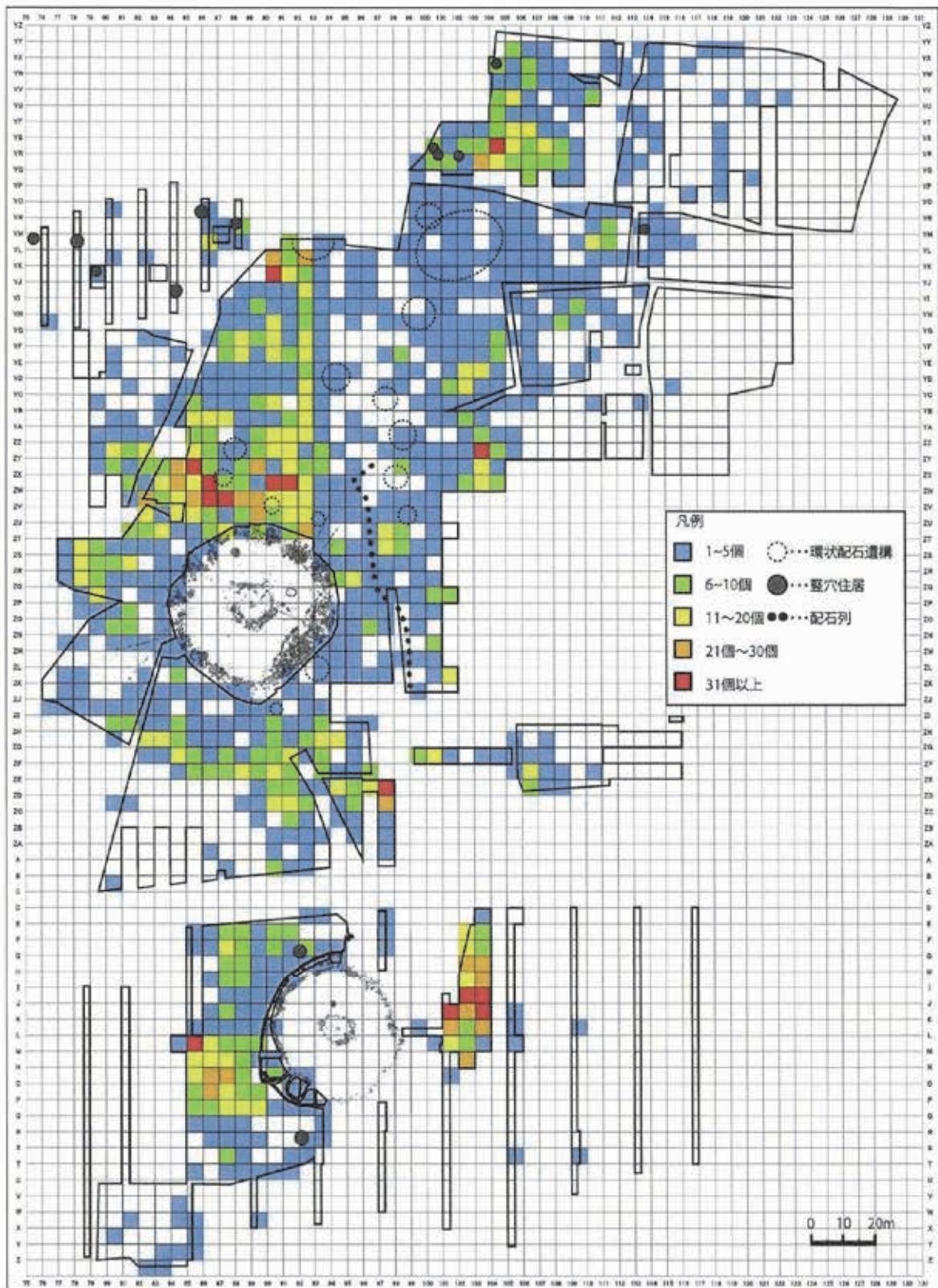
第 157 図 鐸形土製品分布図



第158図 キノコ形土製品分布図



第 159 図 土錐分布図



第 160 図 土器片利用土製品分布図



第161図 ミニチュア土器分布図